

『源氏物語』の命令・勧誘表現再論（四）

川上徳明

一一一

一一二（一）

薫の例について検討する。第17表は薫が話し手の場合の一覧表である。

用例数は六〇、敬度指数はプラス〇、八三である。この数値は第6表に挙げた主要人物の中、男性としては夕霧に次ぐもので、比較的高いものである。

初めに八宮の姫、大君、中君及び弁尼に対する例をみる。なお、場面の展開上、この三者がその場で薫に対し話し手である若干の例も一緒にみることにする。先ず、大君への例から始める。

(110) (薫)「(匂宮の話は) かならず御みづから聞こし召し負ふべきことなりとも (私は) 思ひ給へず。それは、雪

ふみわけて（此処へ）まゐり来たる心ざしばかりを御覧じわかむ、御このかみ心にても（御身は）過ぐさせ給ひてよかし。かの御心よせは、（御身ならで）またことにぞ侍かめる。（中君に）ほのかにの給ふさまも侍めりしを。いさや、それも人のわき聞えがたきことなり。（匂宮への）御返りなどは、いづかたにかは聞え給ふ」と問ひ申し給ふに、（椎本、四・三七〇。薰↓大君、A・①型）

薰は自分の気持ちをストレートには言わぬ。ここでも、もつてまわった言い方をしている。しかし内なる思いは自ら発露する。

過ぐさせ給ひてよかし。

右は「……せ給ひてよ、よかし」の形である。「てよ」と溢れる感情を強く訴え、その命令形の強い響きを「かし」によって和らげたものである。物語中「……てよ」「……せ（させ）給ひてよ」の形式による例は第1表に示したように一七例である。薰には大君に対する二例、中君に対する二例があつて計四例である。これは源氏の二例を上回り、男性の中では最も多い。使用率の高さが知られよう。

この「……（尊敬語）てよ、よかし」の例は、他に「末摘花」の巻の次の一例が見られるだけである。

（源氏は）としごろ思ひわたるさまなどを、いとよくの給ひつゝくれど、（平素にも）まして（末摘花の）ちかき御いらへはたえてなし。（源氏は）わりなのわざやと、うち嘆き給ふ。

「いくそたび君がし、まに負けぬらむものな言ひそといはぬたのみに

の給ひも捨て、よかし。玉だすきくるし」との給ふ。（末摘花、一・二四九。源氏↓末摘花、B・①型）

右は常陸宮邸を訪れた源氏が末摘花に逢つた場面。末摘花への執着ゆえの「嘆き」「くるし」みをそのままに打ち

第17表 薫が話し手の場合

敬度 型 聞手 (地の敬度)	A				B				C				D				N				小計
	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	
匂 宮 ⑥				2																	2
女 二 宮 ⑥				1																	1
大 君 ⑥				4				4													8
中 君 ⑥				5				6													11
横 川 僧 都 ⑥								4													4
仏 ⑥								2													2
宰 相 の 君 ⑥								1													1
藤 侍 従 ⑦										1											1
宇 治 阿 闍 梨 ⑦								1													1
蔵 人 少 将 ⑦								1													1
浮 舟 ⑦								1													1
浮 舟 の 母 ⑦								1													1
辨 尼 ⑦					2	1	1	7													11
辨 達 ⑦												1									1
按 察 君 ⑦								1													1
大 式 ⑦																1					1
女 二 宮 女 房 ⑦												1									1
右 近 (浮舟乳母子) ⑦												1									1
左 近 将 監 ⑦												1									1
内 舎 人 ⑦												1									1
随 身 そ の 他 ⑦												5				1					6
小 君 (浮舟弟) ⑦												2									2
小 計	0	0	0	12	2	1	1	29	0	1	0	12	0	0	0	2	0	0	0	0	60
	12				33				13				2				0				

『源氏物語』の命令・勧誘表現再論(四)

出したような表現である。なお、この文のすこし前、源氏は「男」と表現されている。「男」「女」及び「男君」「女君」という呼称が恋の場面での呼び方、男女関係を強調する呼び方であることは、既に周知のことと思う。

次の例文(11)から(14)までは総角の巻の例である。秋になり、八宮の一周忌のために宇治を訪れた薫は、その夜大君に意中を訴えるが受け入れられない。物越しに對面していた薫はついに「屏風をや

を押し開けて」大君のもとに押し入ったが、事なく朝を迎える。次は、その暁ごろ、和歌を贈答して別れる直前の場面である。

(11) あかくなりゆき、村鳥の立ちさまよふ羽風ちかく聞ゆ。夜ふかきあしたの鐘の音、かすかに響く。(大君)
 「今だに(いで給へ。明けては)いと見ぐるしきを」と、いとわりなく恥づかしげに思したり。(薫)「事有り顔に朝露もえわけ侍るまじ。また、人はいかゞ推しはかりきこゆべき。例のやうに、(私を)なだらかに(夫と)もてなさせ給ひて、たゞ世に違ひたることにて、今より後も、たゞ、かやうにしなさせ給ひてよ。(私には)世にうしろめたき心はあらじと思せ。(私の)かばかりあながちなる心の程も、あはれと思し知らぬこそ、かひなけれ」とて、(山莊を)出て給はむの気色もなし。(居座りは)あさましく、かたはならんとて、(大君)「今よりのちは、さればこそ、もてなし給はんまゝにあらん。(故に)今朝は、また(私の)きこゆるに従ひ給へかし」とて、いとすべなしと(大君は)おぼしたれば、(薫)「あな、苦しや。あかつきの別れや。まだ知らぬことにて、げに惑ひぬべきを」と嘆きがちなり。(総角、四・三九三。薫↓大君、A・①型、B・①型。大君↓薫、B・①型)

ここには薫の二例と大君の一例が見られる。薫の第一例は

「しなさせ給ひてよ、」

とあって、「てよ」による懸命の依頼であることを知る。第二例は

「世にうしろめたき心はあらじと思せ」

とあって、決して心配することはないと釈明する薫の常套の言である。

一方の大君の方は、

「従ひ給へかし、」

とあって、「かし」によって相手をやさしくなだめようとしているのである。

(112) (辨)「さなん」と(薫の語を)きこゆれば、(大君は)「さればよ。(中君に)思ひ移りにけり」と嬉しくて、

心落ちゐて、かの(中君方に)いり給ふべき道にはあらぬ廂の障子をいとよくさして(薫に)対面し給へり。

(薫)「一言、きこえさすべきが、人間くばかりの、しらんは、あやしきを。いさ、か(障子を)あけさせ給へ。

いといぶせし」と(大君に)きこえさせ給へど、(大君)「かくても、いとよく聞えぬべし」とてあけ給はず。

(総角、四・四一三。薫↓大君、A・①型)

ここは、先に例文(8)に関して引用した、薫が弁尼に仲介を頼んだ文に直接する部分である。

「人間くばかりの、しらんは、あやしきを」「いといぶせし」と、薫は何とか障子を開けさせようとする。「あけさせ給へ」は敬度はAと高いが①型の直接的な言い方である。

右に続いて、大君は襖の傍まで出る。そして、「障子のなかより御袖をとらへて、引き寄せていみじう恨む」薫を

なんとかなだめすかそうとする。その薫の口から、今夜、匂宮を中君に逢せたと打ち明けられて、愕然とする。次はそれに続く部分である。

(113) (薫)「今はいふかひなし。ことわり(お詫び)は、かへすがへすきこえさせても、あまりあらば、抓みもひ

ねらせ給へ。(御身は)やむごとなきかた(匂宮)におほし寄るめるを、宿世など言ふめる物、更に心にかなはぬ物に侍るめれば、かの(匂宮の)御心ざしは異に侍りけるを。(私は)いとほしく思ひ給ふるに、かなはぬ身

こそおき所なく、心憂く侍りけれ。猶、(宿縁ゆえ)いかゞはせん、おぼし弱りね。この御障子のかためばかりいと強きも、(二人の仲を)、まことに物清く推し量りきこゆる人も侍らじ。(私を)しるべと誘ひ給へる人(匂宮)の御心にも、まさに、(私が)かく胸ふさがりて(夜を)明かすらんとはおぼしなんや」とて、障子を、も引き破りつべき気色なれば、(大君は)いはん方なく心づきなけれど、こしらへんと思ひしづめて、(大君)「此ののたまふ宿世といふらんかたは、目にも見えぬ事にて、いかにもいかにも思ひたどられず、知らぬ涙のみ霧りふたがる心ちしてなん。……猶、いとかくおどろおどろしう、心憂く、な取りあつめまどはし給ひそ。心よりほかにながらへば、すこし思ひのどまりて聞えん。(只今は)心ちも、更にかきくらすやうにて、いと悩ましきを、こゝにうち休まん。(この袖を)ゆるし給へ」と、いみじくわび給へば、さすがにことわりを(大君が)いとよくの給ふが(薫は)心恥づかしくらうたくおぼえて、……(袖を)許したてまつり給へれば、(総角、四・四一五。薫↓大君、A・①型、B・①型。大君↓薫、B・①型)引用が長くなつたが、ここには次に再掲した三例が連続する。

① 抓みもひねらせ給へ(薫↓大君)

② おぼし弱りね(薫↓大君)

③ ゆるし給へ(大君↓薫)

①の「抓みもひねらせ給へ」によく似た例としては『蜻蛉日記』下巻の

ものもいはれねば、「などか、ものもいはれぬ」とあり。「なにごとをかは」といらへたれば、「などか来ぬ、問はぬ、憎し、あからしとて、打ちも抓みもしたまへかし」といひつづけられるれば、「きこゆべきかぎりのたま

ふめれば、なにかは」とてやみぬ。(天禄三年八月二一日。「日本古典文学全集」三三三六頁)。

がある。暫くぶりに訪ねてきた兼家が、作者がなにも言えないのに業をにやし、なぜおし黙っているのかと、まくし立てた言葉である。「打つなり抓ねるなり(どうとも気のすむように)せよ」というのであって、放任的な表現に近い。一種の強調表現といえよう。

薫の言葉も「抓ねるなりひねるなり(気のすむように)して下さい」というのである。薫の昂ぶった感情によってこんな言葉が飛び出したものと思われる。そもそも「抓みひねる」などということは姫君にはふさわしからぬ行為であろう。『源氏物語』にも他には見られない表現である。

②の「おぼし弱りね」は既に例文⑬の「おぼし弱れ」(夕霧↓落葉宮)の所で触れたが、「猶、(宿縁ゆえ)いかはせんに、おぼし弱りね」即ち、やはり、もうどうにもならぬことと諦めよ(我に従え)、というのである。まことに強引である。文末に助動詞「ぬ」の命令形「ね」があるだけ、夕霧の言葉に比しその意味も強く、感情も一層深い。

右の、薫が大君に迫る言葉は「障子をも引き破りつべき気色」で吐かれたものである。

③の大君の「ゆるし給へ」は「いみじくわび給」いつつも、「さすがにことわりをいとよくの給ふ」長い言葉(途中を省略)の、最後の懇願の一句であり、なんとかこの場をおさめた表現である。

次は、大君の病を聞いた薫が宇治を訪れた場面で、右の例文⑭からは一月余り後のことになる。女房の計らいで薫は大君の御簾の前まで入り込む。

⑭(病床に近く)いとかたはら痛みわざと、(大君は)くるしがり給へど、けにく、はあらで御ぐしもたげ、御

いらへなど聞え給ふ。(匂) 宮の、御心もゆかで、おはし過ぎにし有様など、(薫は) かたり聞え給ひて、(薫) 「のどかに思せ。心いられして(匂宮を) な恨みきこえ給ひそ」など、教へ聞え給へば、(大君) 「こゝには、ともかくもきこえ給はざめり。亡き人の御諫めは、かゝることにこそと、見侍るばかりなん、(中君が) いとほしかりける」とて、泣き給ふ気色なり。(薫は) いと心苦しく、我さへ恥づかしき心地して、「世の中は、とてもかくても、一つさまにて過ぐることに難くなん侍るを。(世の中の) いかなる事をも御覧じ知らぬ(御身などの) 御心どもには、ひとへに(匂宮を) 恨めしなど思すこともあらんを、強ひて思しのどめよ。(この縁は) うしろめたくは、よにあらじとなん、思ひ侍る」など、人の御上をさへあつかふも、(薫には) かつは、怪しくもおほゆ。(総角、四・四四五。薫↓大君、B・①型、B・①型)

ここは薫が匂宮のことに關して大君を慰めているところであり、前例までのような、自身が大君に迫っている場面ではない。第一例は「のどかに思せ。……な恨みきこえ給ひそ」と「教へ聞え給ふ」(おさとし申しなさる) 即ち、静かに説得している調子と見られる。しかし、その慰めの言を拒絶されると「薫は、窮しながら、居直るようにして齒に衣を着せない率直な意見を述べる」(日本古典文学全集、頭注、以下「全集」と略称) のである。そして、この「粗暴にも近い言葉の中に、かえって誠意がうかがえましょう。」(同) と説かれている。第二例の「強ひて思しのどめよ」はその開き直りの中の一句ということになる。

以上で大君に対する全八例を見た。敬度Aが四例、敬度Bが四例で、敬度指数はプラス二、〇〇と高い。

続いて中君の例の検討に移る。中君に対する例は全部で一一例である。

弁の導きで薫は姉妹の寝所に忍び入るが、大君はそれと察して隠れる。薫は中君と事もなく語り明かす。

(115) 逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど、(薫には)程もなく明けぬる心地して、いづれと分くべくもあらずなまめかしき(中君の)御けはひを、人やりならず飽かぬ心ちして、(薫)「あひおほせよ。いと心憂くつらき人(大君)の御さま、見ならひ給ふなよ」など、後瀬を契りて出で給ふ。(総角、四・四〇七。薫↓中君、B・①型)

右は中君に対する最初の例である。大君と「いづれと分くべくもあらずなまめかしき御けはひ」の中君に対して、薫は早くも後瀬を契る。短い言葉の中に「あひおほせよ」という依頼と「見ならひ給ふなよ」という禁止表現とが連続する。ともに文末は「よ」を伴う。優しく、親しみを込めた表現であり、かつ深い思いを含んだ表現である。「全集」はここを

あなたのことを思うこの私にも思いをかけていただきたいのですよ。ほんとに情けなくつれないお方のなさりかたをお見習いになつてはいけません。

と口訳していたが、「新編」では後半の末尾を

お見習いなさいますな。

と改めている。薫の言葉の優しく、柔らかな調子に留意したものであろう。

次は、先の例文(114)の少し後の場面である。重態の大君を看護していた中君は、薫を見て席を外す。その中君に薫が物越しに声をかける。私が看病するから今夜は休め、と。

(116) (大君が)いとゞなよなよと、あえかにて臥し給へるを、むなしく見なして、いかなる心地せんと、(薫は)胸もひしげて(悲しく)おぼゆ。(薫)「日ごろ(姉君を)見たてまつり給ひつらん御心ちも、安からず思され

つらん。今宵だに心やすくうち休ませ給へ。宿直人にて（私が）さぶらふべし」ときこえ給へば、うしろめたけれど（中君は）さるやうこそはとおぼして、（その場より）すこししぞき給へり。（総角、四・四五五。薫↓中君、A・①型）

中君に対する例は約半数が敬度Aであるが、ここもその一例である。「さぶらふべし」といった表現も含め、改まった言葉遣になっている。

中君は匂宮に迎えられて二条院にある。次は匂宮の不在中、薫が中君を見舞いに訪れた時のことである。

(117) (中君)「世の憂きよりはなど人は言ひしをも、さやうに思ひくらぶる心も殊になくて、（私は）年ごろは（宇治に）過し侍りしを。今なん猶いかで静かなるさまにても過ぐさまほしく思ひ給ふるを、さすがに（それも）心にもかなはざめれば、（宇治にある）辨の尼こそうらやましく侍れ。（父の三回忌にて）この二十日あまりの程はかの（山莊に）ちかき寺の鐘の声もききわたさまほしく思え侍るを、（宇治に）忍びて（私を）渡させ給ひてんやと、聞えさせばやとなん、思ひ侍りつる」との給へば、（薫）「（山莊を）あらさじとおもほすとも、いかでかは。心の安き男だにいと行き来の程、荒ましき山道に侍れば、（私も）思ひつ、なん月日も隔たり侍る。故宮の御忌日は、かの阿闍梨に（法要の）さるべき事ども皆言ひおき侍りにき。かしこ（山莊）は猶、尊き方に思し譲りてよ。（山莊を）時々見給ふるにつけては、心惑ひの絶えせぬもあいなきに（寺として）罪失ふさまになし侍りなばやとなん、思ひ侍るを、又、いかゞ思し掟つらん。（私は）ともかくも（御身の）定めさせ給はむに従ひてこそはとてなん。あるべからむやうに、のたまはせよかし。何事も疎からずうけ給はらんのみこそ本意かなふにて侍らめ」など、まめだちたる事どもを（中君に）聞え給ふ。経仏など、この上も供養じ給ふべき

なめり。かやうなるついでに事つけて、(宇治に) やをら籠り居なばやと(中君の) おもむけ給へる気色なれば、(薫) 「(山籠りは) いとあるまじき事なり。猶、何事も心のどかに思しなせ」と教へ給ふ。(宿木、五・五二)。

中君↓薫、A・③型。薫↓中君、B・①型、A・①型、B・①型)

ここには次に再掲した四例が連続する。

① 渡させ給ひてんや (中君↓薫)

② 思し譲りてよ (薫↓中君)

③ のたまはせよかし (薫↓中君)

④ 思しなせ (薫↓中君)

先ず、①の「渡させ給ひてんや」は中君が八宮の忌日を口実に、宇治へ行きたいと依頼している言葉である。中君が話し手の例は物語中全部で六例(うち対薫二例)であるが、ここは唯一の③型である。③型で婉曲に依頼しているのである。しかも、この引用形式は

「『渡させ給ひてんや』と聞えさせばや」となん、思ひ侍りつる」との給へば、

という複合的なもので、

「渡させ給ひてんや」との給へば、

という一次的、直接的な引用形式ではない。引用があたかも入子型の構造を持ち、重層会話文^{*33}に準ずべきものである。それだけに極めて婉曲な表現ということになる。また、敬度Aもこの一例のみで鄭重な表現である。

次に、②の「思し譲りてよ」についてみる。

これは、①の中君の依頼に対し、それは出来ぬことと断った後、山荘は、やはりお寺になさった方がよいと提案したものである。文末に「てよ」があり、じっくりと説得する調子であろう。

続く③は、あなたのお考えのとおりに「のたまはせよかし」、何事も御遠慮なく、というのであり、敬度Aと「かし」によって優しく持ち掛けた形である。

④の「思しなせ」は、中君がなおも「やをら（宇治に）籠り居なばやとおもむけ給へる気色」なのを見て、とんでもないとたしなめ、諭している（「教へ聞え給ふ」）のである。前二例よりは厳しい口調が感じられるように思う。中君は匂宮の夜離れ続きを嘆き薫に消息する。翌日の夕方訪問した薫は、中君の袖をとらえ簾中に入って恋情を打ち明ける。

(118) 女(中君)「さりや、あな心憂と思ふに、何事かは言はれむ。物も言はで、いとゞ引き入り給へば、それにつきていと馴れ顔に、なからは内に入りて(中君に)添ひ臥し給へり。(薫)「……うとうとしく(私を)思すべきにもあらぬを。心憂の御気色や」とうらみ給へば、(中君は)いらへすべき心地もせず、思はずに憎く思ひなりぬるを、せめて思ひしづめて、(中君)「思ひの外なりける御心のほどかな。人の思ふらん事よ。浅まし」とあはめて、泣きぬべき気色なる、少しはことわりなれば、いとほしけれど、(薫)「これは咎あるばかりのことか。かばかりの対面は、いにしへをも思し出でよかし。過ぎにし人の御許しもありし物を。いとこよなう思されにけることこそ、中々うたてあれ。(私には)すきずきしく目ざましき心はあらじと、心やすく思ほせ」とて、いとのだやかにもてなし給へれど、月ごろ、くやしと思ひ渡る心のうちの、苦しきまでなりゆくを、つくづくと(中君に)言ひ続け給ひて、(袖を)許すべき気色にもあらぬに、(中君は)せむ方なく、いみじとも世

の常なり。(宿木、五・七四。薫↓中君、B・①型、B・①型)

ここには「思し出でよかし」と「思ほせ」との二例がある。後者はすきずきしく目ざましき心はあらじと、心やすく思ほせ。

であるが、これは「薫の自己表明としてしばしば発せられる、特徴的な言葉である」(新編「全集」頭注。五・四二八)とされる。この「思ほせ」については後で再度詳しく検討する。

右の例文⑪⑩の後、薫は再び中君を訪れ、簾中で対面する。

⑪⑨ (薫は) なに事につけても、故君(大君)の御事をぞ尽きせず思ひ給へる。(薫)「……(大君愁傷の)慰めばかりに、こゝかしこにも(女の許に)ゆきか、づらひて、人の有様を見んにつけて、(大君思慕の)まぎるゝ事もやあらんなど思ひ寄るをりをり侍れど、更にほかさまに靡くべうも侍らざりけり。よろづに思ひ給へわびては、心の引く方の強からぬわざなりければ、(私の態度を)好きがましきやうに(中君は)思さるらむと恥づかしけれど、あるまじき心のかけてもあらばこそ目ざましからめ、たゞかばかりの程にて、時々思ふ事をも聞えさせ、うけたまはりなどして、隔てなくのたまひ通はむを、誰かは咎め出づべき。世の人に似ぬ心の程は、皆人にもどかるまじく侍るを。(されば)猶、後ろ安く思したれ」など、恨み泣きみきこえ給ふ。(宿木、五・八九。薫↓中君、B・①型)

右の薫の言葉は甚だ長文なので一部省略して引用したが、対面した薫は中君に向かって長々とかき口説く。終の方で「私には、あるまじき心(あなたへの野心)は少しもないのだから、誰が咎めだてしようか」「世の人に似ぬ心の程(世間一般の男に似ない私の気性)は誰からも非難されるはずがない」。だから、「猶、後ろ安く思したれ」と

「恨みみ泣きみ」口説いている。なお、右の「世の人に似ぬ云々」については「薫の誠実さ。自らこう発言するところにも、薫らしさがある」という指摘がある。類似の表現は既に例文(III)・(II)にも見られた。^{*34}

問題の「思したれ」は完了の助動詞「たり」の命令形による例であるが、この形式は仮名文学作品（和文）では一般に甚だ限られていて、『源氏物語』にも次を含めて二例しかない。

（源氏）「あか月、かしこにもせん。車の装束さながら隨身一人二人、仰せおきたれ」との給ふ。（若紫、一・二二三。源氏↓惟光）

(120) （尋ね出したという女が大君に）似たりとの給ふゆかりに耳とまりて、（薫）「かばかりにては、同じうはいひ果てさせ給うてよ」といぶかしがり給へど、（父宮の事故）さすがにかたはら痛くて、（中君は）え細かにも聞え給はず。（中君）「たづねんと思す心あらば、そのあたりとは聞えつべけれど、委しうはしも、え知らずや。又、あまり言はゞ御心劣りもしぬべき事になむ」とのたまへば、（薫）「世を海中にも（大君の）魂のありか尋ねには、心の限り進みぬべきを。いとさまで思ふべきにはあらざなれど、（大君亡くて）いとかく慰めむかたなきよりはと、思ひより侍る人形の願ひばかりには、などかは（其の人を）山里の本尊にも思ひ侍らざらむ。猶、（其の人の事を）たしかにのたまはせよ」とうちつけに責め聞え給ふ。（宿木、五・九二。薫↓中君、A・①型）

中君は、薫の関心を自分からそらそうとして、大君に似ている異母妹の浮舟のことを薫にほめかす。それを聞いた薫はもっと詳しく聞きたいといぶかしがる。「いひ果てさせ給うてよ」と、懇ろに心を込めて依頼しているのである。

第二例は「猶、たしかにのたまはせよとうちつけに責め」るのである。この傍点部は「急に態度を変えて、切実な気持ちで懇願するのである」（「全集」頭注）と説かれる。妥当であろう。

翌年（例文(120)の後）の二月、薫は女二宮と結婚、世間の羨望を集める。八月、匂宮の留守中、薫は二条院に中君を訪れる。

(120) 例の、物語いとなつかしげに（中君に）聞え給ふ。事に触れて、たゞいにしへの（大君の）忘れがたく、世の中の物憂くなりまさる由を、あらはには言ひなさで、かすめ愁へ給ふ。……（中君を）恨み聞え給ふ事も多ければ、いとわりなくうち嘆きて、かゝる御心を休むる御禊をせさせたまつらまほしく（中君は）思すにやあらむ、かの人形（浮舟）の給ひ出で、（中君）「いと忍びて（その人形は）このわたりになむ」とほのめかし聞え給ふを、かれ（薫）もなべての心地はせず（人形が）ゆかしくなりにたれど、うちつけにふと（浮舟に）うつらむ心地、はた、せず。（薫）「いでや、その本尊、願ひ満て給ふべくはこそ、尊からめ、時々心やましくは、なかなか山水も濁りぬべく」との給へば、はてはては、（中君）「うたての御聖心や」と、ほのかに笑ひ給ふも、をかしう聞ゆ。（薫）「いで、さらば（先方に）つたへ果てさせ給へかし。この御のがれ言葉こそ思ひ出づればゆゝしく」との給ひても、また涙ぐみぬ。……暗うなるもうるさければ、かりそめに（この邸に）物したる人（浮舟の母）もあやしくと思ふらんもつ、ましきを、（中君）「今宵はなほ疾く帰り給ひね」と、こしらへやり給ふ。（東屋、五・一五九。薫↓中君、A・①型、中君↓薫、B・①型）

ここには薫、中君の各一例がある。薫の言葉はつたへ果てさせ給へかし。

とある。敬度Aの鄭重な表現であるが、①型の直接的な依頼である。更に依頼の内容も「つたへーさせ給へ」ではなくて、「つたへ果てーさせ給へ」であるから、すつかり（よくよく）伝えて欲しい、ということになる。文末の「かし」はこの形式・内容の強さを和らげるものであろう。

薫の用例中、「かし」のあるものは五例であるが、内訳は大君に対する一例、中君に対する三例、弁の尼に対する一例となっていて、中君に集中していることが知られる。そして薫の中君に対する例は全部で一一例であるから、その使用率の高さも確認されようと思う。薫は中君に対して、柔らかに依頼している場合が比較的多いということになる（「かし」の詳細については後述）。

一方の中君の言葉は

帰り給ひね。

とある。物語中「……給ひね」「……せ（させ）給ひね」の例は一二例であるが、中君の使用はこの一例のみである。今宵はーなほー疾くー帰り給ひね。

傍点の語、特に「ね」には、切に相手に求める気持ちが込められていよう。

以上で、中君に対する全一一例を見た。敬度Aが五例、敬度Bが六例で、敬度指数はプラス一、九一である。大君はプラス二、〇〇であったから、両者ほとんど相違がない。

ここで、右敬度Bの六例の述語部分を抜き出すと次のようになる。便宜、先の例文番号に関わりなく番号を付けた。

①「あひおほせよ」例文(15)

② 「(山莊は) 尊き方に思し譲りてよ」 例文(117)

③ 「何事も心のどかに思しなせ」 例文(117)

④ 「いにしへをも思し出でよかし」 例文(118)

⑤ 「……と心やすく思ほせ」 例文(118)

⑥ 「猶、後ろ安く思したれ」 例文(119)

一見して知られるように、これらの述語動詞はすべて「思す」「思ほす」及びその派生形である。六例が敬度Bなのはここに関わる。というのはいわゆる最高敬語である「思し召す」「思ほし召す」(敬度A)の用法は限られていて、中君に対してこの語を使うことはない。否、『源氏物語』全体でも命令・勧誘表現の「思し召せ」「思ほし召せ」の例は全く見られないのである。中君に対する全一例中、六例が敬度Bの理由はここにある。

ところで、六例までが「思す」「思ほす」及びその派生形であることは何を意味するか。もつとも意味上は右①・②と③以下とは区別すべきものであるろう。というのは、①は中君に向かって愛を求めたものであり、②は山莊の世話を他に任せよというに対して、③以下は概して「……と思つて下さい」という要求だからである。

特に⑤・⑥は

⑤ 「すきずきしく目ざましき心はあらじと、心やすく思ほせ」

⑥ 「世の人に似ぬ心の程は、皆人にもどかるまじく侍るを。後ろ安く思したれ」

というふうには、薫は、私にはあるまじき心はない、世間一般の男性とは違うのだから安心せよと繰り返しているのである。いわゆる薫の道心から発せられる語であろうが、薫の人間性を特徴づける物言いである。

右と同様の事実が先の対大君の場合にも見られる。既述の八例中の敬度Bの四例を中君の場合と同様にして次に示す。

⑦ 「世にうしろめたき心はあらじと思せ」例文(11)

⑧ 「いかゞはせんにおほし弱りね」例文(113)

⑨ 「のどかに思せ」例文(114)

⑩ 「強ひて思しのどめよ」例文(114)

これらはほぼ中君の場合と同じく、「……と思つて下さい」という要求であり、特に⑦は前述のように、薫が、決して心配することはないと思つて下さいと、自分の気持ちを押し付ける言葉である。

以上、中君に対する一一例、大君に対する八例、計一九例中実に一〇例までが「思す」「思ほす」及びその派生形によるものであることを見た。第1表の「①型・1」に含まれる動詞は二〇〇例であるが、その中この「思す」他による例は二九例である。薫の例は物語全体の用例の三分の一以上に当たる。そして薫の話し手としての例は全六〇例であるが、大君、中君に対する以外にこういう例はない（薫の関わる主要なもう一人の女性である浮舟に対しても、こうした例は見られない。もつとも浮舟に対する例は僅かに一例だけであるが）。

このような例は他にはあまり見られない。薫とよく対比される匂宮の用例は三一例であるが、こうした例はない。既述の柏木、夕霧にも見られない。それでは用例の最も多い源氏の場合どうか、主な相手についてみる。

玉鬘への例は一四例、女三宮への例は九例、夕顔への例は六例であるが、いずれも⑤・⑥・⑦と類似の例はない。紫上に対する例が二七例と抜きんでて多いが、僅かに右③・⑨と言葉の上で似た、次のような例が見られるだけで

ある。

朝顔の巻、源氏は前齋院の朝顔に並々ならぬ執心ぶりを見せ、紫上はそれを恨み、嫉妬する。「二条院に夜離れ重ね給ふを、女君（紫上）は、たはぶれにく、のみおぼす。しのび給へど、いかゞ（涙の）うちこぼる、折もなからむ」といった状態である。源氏は弁明し、慰める。

(122) (源氏)「あやしく例ならぬ御気色こそ心得がたけれ」とて、御髪をかきやりつ、いとほしとおぼしたる様も、絵に書かまほしき（夫婦の）御あはひなり。「宮（藤壺）うせ給ひて後、うへ（冷泉）のいとさうざうしげにのみ世を思したるも、心ぐるしう見たてまつり、太政大臣も物し給はで、（外に政務を）見譲る人なき事繁さになむ。この程の絶え間などを、見ならはぬことにおほすらむも、ことわりにあはれなれど、今は、さりとも心のどかに思せ。おとなび給ひためれど、まだ、いと思ひやりもなく、人の心も見知らぬさまにものし給ふこそらうたけれ」など（涙で）まろがれたる御額髪ひきつくろひ給へど、（紫上は）いよいよそむきて物も聞え給はず。（朝顔、二・二六五。源氏↓紫上、B・①型）

問題の「今は、さりとも心のどかに思せ」の注釈を見るに、『湖月抄』は

絶間おくともかはる事はあらじと也。

と傍注し、「大系」は

（体験も豊かになり、年齢も加わった）今では、たといそういう事（夜がれなど）があるとしても。

と頭注し、更に

私には仇心無ければ

と傍注する。「集成」は

もういくら何でも安心しておいでなさい。絶え間を置くことはあっても心変りはないから、という気持と頭注する。

これら諸注にみるとおり、「さりとも」は夜がれ云々の意であり、言外に心変りのないことをほのめかすものである。

前述のように、紫上は源氏の朝顔への執心を恨み、嫉妬している。源氏はあれこれと弁明し、なんとか紫上をなだめようとする。こうした場面で、男が変わらぬ愛を示すのは常のことである。従って、この「心のどかに思せ」の例は単に言葉の形式上の類似であって、薫の⑤・⑥・⑦の如き「自分にはすきすきしき心はない」などという自己釈明の言葉とは全く異質のものである。結局、用例の最も多い源氏にも薫のような例は全く見られない。

右の検討によって、薫の大君、中君への命令・勧誘表現の物言い、換言すれば、二人への対し方が極めて特異なものであることを知るであろう。

なお、先に大君と中君の敬度指数を比較したが、中君の①から⑥の六例、大君の⑦から⑩の四例を除外すれば、それぞれ敬度Aのみの用例となり、両者の敬度指数は全く相違がないことになる。

弁尼に対する例を見る。次は既述の、八宮の一周忌が近づき宇治を訪れた薫が、夜大君のもとに押し入ったが、事なく翌朝を迎えた部分(例文Ⅲ)の少し前に位置する。薫は一旦大君に訴えた後、「例の古人(弁尼)めし出で、ぞ語らひ」あい、大君の真意(薫と中君の結婚)を聞かされる。ここでは薫、弁尼それぞれの甚だ長い会話(「大

系」本文で各二一行)が続く。ここには薫の会話部分から最後の五行ほどを引用する。

(123) (薫)「……なほざりのすさびにても、懸想だちたることは(私には)いとまばゆくありつかず、はしたなき

こちごちしさにて(言はず)、まいて心にしめたる方のことは、うち出づることも難くて、(大君を)うらめしくも、いぶせくも、思ひきこゆる気色をだに(大君に)見えたてまつらぬこそ、われながら限りなくかたくなしきわざなれ。(匂)宮の御ことをも、さりともあしざまには聞えじと、(私に)まかせてやは見給はぬ」など、いひ居給へり。(総角、四・三八七。薫↓弁尼、B・④型)

ここは「やは……給はぬ」即ち「反語……否定」の形式による④型の形式であるが、この例は『源氏物語』全体で三例である(第1表参照)。他の二例を次に挙げる。

①「さらば、その心安からむ所に、消息し給へ。身づからやは、かしこに出で給はぬ」とのたまへば、(東屋、五・一八五。薫↓弁尼、B・④型)

② 今日も、所もなく(物見車が)たちにけり。馬場のおとゞの程にたてわづらひて、(源氏)「上達部の車ども多くて、物騒がしげなるわたりかな」と、やすらひ給ふに、よろしき女車の、いたう乗りこぼれたるより、扇をさしいで、人(源氏の供人)をまねき寄せて、(女)「こゝにやは立たせ給はぬ。所さり聞えむ」と聞えたり。(葵、一・三三六。女⇨源内侍↓源氏の供人、A・④型)

④型(「やは……(せ)給はぬ」)は命令・勧誘表現の四段型体系の中で、最も婉曲、間接的な表現形式である。

①は薫が弁尼に浮舟への仲介を依頼したもの、②は源内侍が源氏の供人に駐車を勧めたものである。それぞれ

① 君自身まあ、その隠れ家に出かけて下されませぬか。(出かけて下されよ。)

⑥ ここにまあ、お車はお立ち遊ばしませぬか。

などと訳される（「大系」頭注）。この訳文にみるようにこれは婉曲な、屈折した依頼または勧誘の表現形式である。薫が八宮の姫君の後見としての弁尼に対して、全般に甚だ鄭重なもの言いをしていることについては、既に例文⑧5に関連して触れた。右に見たように『源氏物語』の④型の「やは……（せ）給はぬ」三例のうち二例までが、薫から弁尼に対するものである。更にこの他、後述するように同じく③型、②型の各一例が見られる。こうした事実からも、薫が弁尼に対して実に鄭重なもの言いをしていることが知られよう。^{*35}

先の例文⑫2で、（引用は大幅に省略したが）薫は弁尼に、自分が今まで結婚せずにきた心情や、自分の謹直な人柄、大君への思いの真実さなどを、くどくどと訴える。そして最後に、匂宮と中君の結婚の仲介の件に言及した。しかし、それは決して「まかせて見給へ」（①型）といった直線的な言い方ではなかった。問題の「まかせてやは見給はぬ」を説明的な訳で示せば

まかせて見ては下さいませんか（いかがでしょう。まかせて見て下さい）。
 となろう。屈折した、相手を立てた表現である。

次は例文⑫の直前の場面の例であり、かつ、先に例文⑧5に関して一部引用した例である。

薫は大君の意向が自分と中君との結婚にあると知り、大君と自分の仲を遂げるためにも懇望する匂宮に中君を譲ろうと決心する。ここは匂宮を宇治に案内した薫が、先ず弁尼を欺く言葉である。

⑫4 宮を御馬にて、暗きまぎれに（山荘に）おはしませ給ひて、辨召し出で、（薫）「こゝもと（大君）にただ一言きこえさすべき事なん侍るを、（先夜私を）おほし放つさま見たてまつりてしに、いと恥づかしけれど、

(このまま) ひたやごもりにてはえやむまじきを。今すこし更かしてを、(私を) ありしさまには(中君方へ) みちびき給ひてむや」など、うらもなく語らひ給へば、(弁尼は) いづ方にも同じことにこそはなど思ひて、

(大君のお前に) まゐりぬ。(総角、四・四一三。薰↓弁尼、B・③型)

既に触れたように、これは弁尼を欺く言葉で、「うらもなく語らひ給へば」とあるが、この部分

「うら(裏)なし」は、何の底意もないさま。ここは、そのように装う。(「全集」頭注)

と説かれる。現世を厭い、道心を身上とするとされる薰であるが、ここはなかなかしたたかである。ただし、「みちびき給ひてむや」であつて、「みちびき給へ」ではない。これは薰の用例のうち唯一のBの③型の例である。弁尼を欺いているところだけに、気が咎めるか、さすがにカラツとした、直線的なものの言いが出来ないところなのである。更に「うらもなく語らひ給へば」であつて「うらもなくの給へば」ではない。じっくり相談をもちかける調子なのである。

次は、亡き八宮の寝殿を改築するに当たつて、薰が弁尼と語らう場面である。

(125) (八宮の寝殿を) この度ばかりこそは見めと(薰は) おぼして、(彼方此方を) たちめぐりつゝ見給へば、(八宮の) 仏も皆かの寺に移してければ、(今は) あま君(弁尼)の行ひの具のみあり。(弁尼が) いとはかなげに住まひたるを、あはれに、いかにして過ぐすらんと、(薰は) 見給ふ。(薰)「この寝殿は変へて造るべきやうあり。造り出でん程は、(君は) かの廊に物し給へ。京の宮(中君方)に取り渡さるべき物などあらば、(私の) 庄の人召して、さるべからむやうに物し給へ」など、(弁尼に) まめやかなる事どもを語らひ給ふ。(宿木、五・九七。薰↓弁尼、B・①型、B・①型)

ここには「物し給へ」の形で二例連続する。「まめやかなる事どもを語らひ給ふ」とあり、実際的な用件をあれこれと打ち合わせている。①型で、かつ簡潔なものの言いがてきぱきとした印象を与える。ここらあたり世故に長けた、実務家的な薫の一面を窺わせるところであろう。

次は、例文(124)と同じ日の夜、薫は弁尼から浮舟の素性を聞き、亡き大君に似ているということ仲介を頼む。

(126) (浮舟の上を) くはしう聞き明らめ給ひて、さらば、まことにてもあらむかし。(浮舟を) 見ばやと思ふ心出できぬ。(薫)「昔の(大君の) 御けはひに、かけても触れたらむ人は、知らぬ国までも尋ね知らまほしき心あるを、数まへ給はざりけれど、(浮舟は) け近き人にこそはあなれ。わざとはなくとも、このわたりにも、(浮舟が) 音なふ折あらむついでに、(私が) かくなむ言ひしとつたへ給へ」などばかり(弁尼に) のたまひ置く。
(宿木、五・一〇〇。薫↓弁尼、B・①型)

次も同じく浮舟への仲介を依頼する言葉である。宇治に赴いた薫は、偶然、初瀬詣での途次の浮舟を垣間見る。大君に似た浮舟の容姿に感動して涙し、弁尼に伝言を依頼することになる。

(127) (薫)「田舎びたるひとどもに、忍びやつれたるありきも見えじとて、口かためつれど、いかゞあらむ。(私)の) 下衆男どもは隠れあらじかし。さて、いかゞすべき。(浮舟が) ひとり物し給ふらんこそ中々心安かなれ。かく(浮舟との) ちぎり深くてなむ(ここに) 参り来あひたると(浮舟に) つたへ給へかし」とのたまへば、
(弁尼)「うちつけに、いつの程なる御契りにかは」と、うち笑ひて、(弁尼)「さらば、しか伝へ侍らむ」とて
(奥に) 入るに、(宿木、五・一二七。薫↓弁尼、B・①型)

例文(126)は「つたへ給へ」で、ここは「つたへ給へかし」である。「かし」によって和らげ、より懇ろな依頼になっ

ていよう。

この後も、弁尼に浮舟への仲介を依頼する言葉が続く。宇治の御堂が完成した後、宇治を訪れた薫は弁尼に浮舟の隠れ家を訪問することを依頼する。

(128) 辨の尼君の方に立ち寄り給へれば、(弁尼)いと悲しと見たてまつるに、たゞひそみにひそむ。(薫は)長押にかりそめに居給ひて、簾垂のつま引き上げて物語し給ふ。几帳に隠ろへて居たり。事のついでに、(薫)「かの人は、さいつ頃、宮にと聞きしを、さすがにうひうひしく思えてこそ音づれ寄らね。なほ、これより(わが思いを)伝へ果て給へ」との給へば、(弁尼)「一日、かの母君の文侍りき。忌違ふとて、こゝかしこになむあぐがれ給ふめる。この頃もあやしき小家にかくろへ、物し給ふめるも、いと心苦しく、少し近き程ならましかば、そこ(宇治)にも(浮舟を)わたしして心安かるべきを、荒ましき山道に、たは易くもえ思ひ立たでなむ、と侍りし」と聞こゆ。(薫)「人々のかく恐ろしくすめる道に、まるこそ古り難く分けくれ。(大君との)何ばかりの契りにか、と思ふは、あはれになむ」とて、例の涙ぐみ給へり。(薫)「さらば、その心安からむ所に消息し給へ。身づからやは、かしこ(隠れ家)に出て給はぬ」とのたまへば、(弁尼)「仰言を(浮舟に)つたへ侍らん事はやすし。今更に京を見侍らむことは、物うくて。宮にだにえ参らぬを」と聞ゆ。(東屋、五・一八四。薫↓弁尼、B・①型、B・①型、B・④型)

ここには次に再掲した三例がある。

① 伝へ果て給へ

② 消息し給へ

③身づからやは、かしこに出で給はぬ

このうち①は浮舟への伝言を、②は同じく消息を頼んでいるものである。それに対し、③は弁尼自身に隠れ家の訪問を求めたものである。そこへは「荒ましき山道」「人々のかく恐ろしくすめる道」を分けて行かねばならぬ。薫もさすがに遠慮がちに相手を立てた、婉曲な口振りである。②、③は連続しているが、こうした依頼内容の難易が表現形式の相違をもたらしたものであろう。例文①、②が①型（これは例文(125)・(126)も同様であった）で、例文③が④型である理由は以上のように考えられる。なお、この例文③（④型）の表現価値については、先の例文(123)に関して既に述べた。

以下は右の文に直接する。

(129) (薫)「などでてか。ともかくも人の聞き伝えばこそ（噂も）あらめ。愛宕の聖だに時にしたがひては（京に）

出でずやはありける。深き誓ひを破りて、人の願ひを満て給はむこそ、尊からめ」と、の給へば、（弁尼）「人渡すことも侍らぬに、きゝにくき事もこそ出でまうで来れ」と、苦しげに思ひたれど、（薫）「なほ（隠れ家は）よき折なゝるを」と、例ならず強ひて、「明後日ばかり車たてまつらむ。その旅の所たづね置き給へ。ゆめ、

（私は）をこがましよう僻わざすまじくを」と、ほゝ笑みての給へば、（弁尼は）煩はしく、いかにおぼすことならむと、思へど、奥なくあはあはしからぬ御心ざまなれば、おのづから我が御ためにも、人聞きなどはつゝみ給ふらむと思ひて、（弁尼）「さらば、うけたまはりぬ。（お邸に）近きほどにこそ（隠れ家は侍れ）。御文などを（浮舟に）見せさせ給へかし。ふりはへ（私が）さかしらめきて、心しらひのやうに（浮舟方に）思はれ侍らんも、今更に、伊賀たうめにや（ならん）と、つゝましくてなむ」と聞ゆ。（東屋、五・一八六。薫↓弁尼、

B・①型、弁尼↓薫、A・①型)

薫の言葉は、明後日ぐらいにここに車をまわすから、探しておいてくれ、というので有無を言わさぬ調子である。まさしく「例ならず強ひて」の言であろう。しかし、それに続いて「ゆめ、をこがましう僻わざすまじくを」と弁解するところがいかにも薫らしいと言うべきか。当惑しながらも、弁尼は思い直して「さらば、うけたまはりぬ」と承け引く。

弁尼の言葉は「見せさせ給へかし」とある。敬度Aはそれとして、ここでは文末の「かし」について一言する。命令・勧誘表現における「かし」の例は物語中に全四八例である。このうち男から女に対する例が三一例で最も多く、逆に女から男に対する例はわずかに七例である。全体の七分の一に過ぎない。「かし」は命令形の強さを和らげ、相手に優しく働き掛ける調子の語であるが、この弁尼の言葉も、逸る薫を優しくなだめているといったところであろう。なお、弁尼の「かし」の用例はここだけである。

弁尼に迎えの車をやって、浮舟の三条の隠れ家に行かせた後、薫は夜になって自らも浮舟を訪問し、一夜語り合う。次は翌朝、薫が浮舟を宇治に連れ出す場面である。

(130) 尼君(弁尼)「こたみは(御供に)まゐらじ。宮(中君)のうへ聞こし召さむ事もあるに、(宇治より)忍びて(京に)行き帰り侍らんも、いとうたてなむ」と聞ゆれど、(中君に)まだきこのことを聞かせたてまつらんも、(薫は)心恥づかしく思え給ひて、(薫)「それは後にも罪避り申し給ひてむ。かしこもしるべなくては、たづきなき所を」と責めての給ふ。(薫)「人一人や(供に)侍るべき」との給へば(弁尼は)この君に添ひたる侍従と(供に)乗りぬ。(東屋、五・一九二。薫↓弁尼、B・②型)

この「罪避り申し給ひてむ」は「罪避り申し給ひてよ」という命令形（①型）による表現を和らげたものと解する。くだいて言えば、中君に対しては、あとになって申し訳したらよいだろう、という訳である。『湖月抄』は「薫の詞也中君には追てもことわり申し給へと也」と傍注する。

なお、「人一人や侍るべき」は命令・勧誘表現の例とはしない。このような「や……べき」の形式で命令・勧誘を表わすものはないからである。また、補足すれば、弁尼に対する命令・勧誘表現はこれまでに確認したとおり全一例すべて「給ふ」（敬度B）待遇であるが、ここは無敬語だからである。これが弁尼に対する命令・勧誘表現であれば、他の例と同じく敬体をとって「人一人侍らせ給へ」または「人一人侍らせ給はむ」とでもなるべきところであろう。

ただし、『湖月抄』頭注所引の『咲花抄』には「誰にても一人うきふねのともにもまるべしと、かゝるの宣ふ也。」とあり、現在の注釈書類にも「誰か一人お供するように」というような注を付けるものが多いが、これは場面から類推したものであろう。ここは「誰か一人ぐらゐお供申しあげるのがいいのではないか^{*36}」というあたりが最も忠実な現代語訳であろう。ここから一歩進めば「そうせよ」という命令・勧誘表現につながるものであるが、前述の理由によって、あえて用例としなかつたものである。

以上で、薫から弁尼に対するすべての用例を検討した。全一例で、すべて敬度B、従って敬度指数プラス一、〇〇である。この敬度指数は、女房に対するものとしては異例の高さである。既述の、柏木の小侍従に対する例を想起させる。

物語の展開上、ここで薫から浮舟本人に対する例をみる。次は右の例文(130)に続く、宇治へ向かう車中の場面である。

(131) (弁尼の) 忍び難げなる鼻すゝりを(薫が) 聞き給ひて、我も忍やかにうちかみて、いかゞ思ふらんといとほしければ、(薫) 「あまたの年頃、この道を行きかふ度かさなるを思ふに、そこはかたく物あはれなるかな。(御身も) 少し起きあがりて、この山の色をも見給へ。いと埋もれたりや」と、強ひてかき起こし給へば、(顔を) をかきし程にさし隠して、つゝましげに見出だしたるまみなどは、(大君を) いとよく思ひ出でらるれど、(浮舟が) おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。(東屋、五・一九三。薫↓浮舟、B・①型)

浮舟に対してはこの一例だけで、敬度はBである。前述の大君や中君に対しては特殊の場合(「思す」「思ほす」等の命令形による例)を除いてはすべて敬度Aであった。浮舟へのこの一例だけをもって、これ以上の言はひかえるが、仮に用例が増えてもこの敬度は変わらぬものと思われる。即ち敬度Aの例は見られぬであろう。仮に都に迎えられたとしても、薫によつて召人並の待遇しか与えられぬであろう浮舟と、八宮の姫君大君、中君との厳然たる身分の差異の反映による。なお、地の文の待遇をみるに大君、中君は常に⑥であるが、浮舟はここでは③である。

場面は前後するが、ついでに弁尼から薫に対する残る一例をここで挙げておくこととする。薫が柏木の形見の文反故を弁尼から受け取る場面である。

(132) (薫) 「よし、さらば、この昔物語はつきすべうなむあらぬ。また人聞かぬ心やすき所にてきこえむ。侍従と

いひし人は、ほのかにおほゆるは、五つ六つばかりなりし程にや、にはかに胸をやみて亡せにきとなむ聞く。かゝる対面なくは、(私は) 罪重き身にてすぎぬべかりけること」などのたまふ。(弁尼は) さ、やかに押し巻きあはせたる反故どもの、黴くさきを袋に縫ひいれたる、取りいで、たてまつる。(弁尼)「お前にて(これは) うしなはせ給へ。われなほ生くべくもあらずなりにたり、とのたまはせて、この御文を取りあつめて(私に) たまはせたりければ、小侍従にまたあひ見侍らむついでに、さだかに(女三宮に) 伝へ参らせんと思ひ給へしを。やがて別れ侍りしも、わたくしごとには飽かず悲しうなむ思う給ふる」ときこゆ。(薫は) つれなくて、これは隠い給うつ。(橋姫、四・三三四。弁尼↓薫、A・①型)

前掲の例文(129)と同様に敬度はAである。

続いて匂宮に対する例を見る。薫・匂宮・浮舟は三角関係にある。次は匂宮が薫をよそおって浮舟に近付き契つた翌日、薫が事情を知らずに病気の匂宮を見舞った場面である。

(133) 夕つ方、右大将(薫)、(匂宮方に) まゐり給へり。(匂宮)「こなたにを」とて、うち解けながら対面し給へり。(薫)「悩ましげにおはしますと侍りつれば、宮(明石中宮) にもいとおぼつかなく思し召してなん。いかやうなる御悩みにか」と聞え給ふ。……いと苦しげに見え給へば(薫)「不便なるわざかな。おどろおどろしからぬ御心地の、さすがに日数ふるは、いと悪しきわざに侍り。御風よく繕はせ給へ」など、まめやかに聞え置きて出で給ひぬ。(浮舟、五・二二九。薫↓匂宮、A・①型)

浮舟の死後、浮舟を失った悲嘆から病床に臥す匂宮を見舞った薫が、匂宮の悲嘆ぶりに密通を想像し、両者は互

いに胸中を付度しあう。

(134) 気色のいさ、か乱り顔なるを、あやしくいとほしと(匂宮は)おほせど、つれなくて、(匂宮)「いとあはれなる事にこそ。昨日ほのかに聞き侍りき。いかにとも聞ゆべく思ひ侍りながら、わざと人に聞かせ給はぬ事と、聞き侍りしかばなん」とつれなくの給へど、(悲嘆は)いと堪へ難ければ、言少なにておはします。(薫)「さる方にも、御覽ぜさせばや、と思ひ給へりし人になん。おのづからさもや侍りけむ、(御身の)宮にも参り通ふべき故、侍りしかば」など、少しづ、気色ばみて、(薫)「御心地、例ならぬ程は、すぞろなる世のこと聞し召し入れ、御耳驚くも、あいなきことになん。よくつ、しませおはしませ」など、聞えおきて(薫は)出で給ひぬ。

(蜻蛉、五・二九三。薫↓匂宮、A・①型)

右の薫の言葉には、随所に匂宮への当て擦りが混じっている。しかし、言葉遣は鄭重である。ここはつ、しませ、(敬語) + おはしませ、(最高敬語)

の形である。敬度は一往Aとするが、甚だ高い敬意を込めた表現になっている。^{*37}

匂宮に対する例は右の二例で、敬度はいずれもA、従って敬度指数は最高値のプラス三、〇〇である。

隨身その他に対する六例のうち、一例だけ敬度Dのものがある。次の例である。

匂宮の使者と薫の使者とがはち合わせして、薫は匂宮と浮舟との秘密を知る。薫は浮舟のもとに隨身を遣わし文を送る。

(135) 例の隨身召して、御手づから人間に召し寄せたり。(薫)「道定の朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ」(隨身)

「さなむ侍る」と申す。(薰)「宇治へは、常にやこのありけむ男は遣るらむ。(浮舟は)かすかにて居たる人なれば、道定も(浮舟に)思ひ懸くらむかし」と、うちうめき給ひて、(薰)「人に見えでを、まかれ。をこなり」との給ふ。(浮舟、五・二五八。薰↓隨身、D・①型)

右で敬度がDなのは述語動詞が「まかる」であることによる。これは謙讓語による聞き手即ち第二人称卑下の語であり、「受け手尊敬」の敬意が話し手自身に向かうものである。なお、「まかれ」は物語中これが唯一の例で、他にはない。

右以外の五例は次のような例で、軽度はいずれもCである。

「知るべせよ」(橋姫、四・三一三。薰↓八宮山莊の宿直人めく男、C・①型)

「(姫達に)きこえよ」(橋姫、四・三二五。薰↓八宮山莊の宿直人めく男、①型)

「車さし出ださせよ」(宿木、五・四六。薰↓侍者、C・①型)

「御車いれよ」(宿木、五・一二〇。薰↓浮舟の召使、C・①型)

「(護衛に)つけよ」(東屋、五・一八七。薰↓家人、C・①型)

横川僧都に対する四例はすべて夢浮橋の巻の中段に集中する。

次は、薰が横川に僧都を訪ね、浮舟発見以来の事情を聞き、僧都に小野の里に下ってほしい、つまり、小野に私を連れて行ってほしい、と依頼するところである。

(36) (薰)「いと便なきしるべとはおぼすとも、かの坂本におり給へ。かばかり聞きて、なのめに(私の)思ひ過

ぐすべくは思ひ侍らざりし人なるを。夢のやうなる（昔の）事ども、（尼姿の）いまだに語り合はせんとなむ（私は）思ひ給ふる」との給ふ気色、いとあはれと（僧都の）思ひ給へれば、形を変へ、世を背きにきとおぼえたれど、髪鬚を剃りたる法師だに（愛着の）あやしき心は失せぬもあなり。まして女の御身といふ物はいかゝあらん。いとほしう、罪得ぬべきわざにもあるべきかなと、あぢきなく（僧都は）心乱れぬ。（僧都）「坂本に）まかり下りむこと、今日明日は障り侍り。月立ちてのほどに、（私より）御消息を（使ひして）申させ侍らん」と、申し給ふ。（夢浮橋、五・四二二。薰↓僧都、B・①型）

右に続いて、薰は浮舟の弟小君に託す手紙を僧都に依頼する。

(137) かのせうとの童、御供に率ておはしたりけり。異兄弟どもよりは、かたちも清げなるを、呼び出で給ひて、（薰）「これなん、その人（浮舟）の近きゆかりなるを、これ（小君）を（その人へ）かつがつ物せむ。（貴僧の）御文ひとくだり賜へ。その人とはなくて、たゞ、たづね聞ゆる人なむあるとばかりの心を知らせ給へ」との給へば、（夢浮橋、五・四二三。薰↓僧都、B・①型、B・①型）

右の依頼にも洩る僧都に対して、自分は幼少の頃から仏道に志が深かったこと、俗情によって浮舟の道心を乱すことは決して考えていないこと、浮舟の母親を慰めたいのだということなどを、薰は例によって長々と説明し、僧都に承諾させようとする。次は右に直接する。

(138) 僧都も、げにと、うなづきて、「いとゞたふときこと」など聞え給ふ程に、日も暮れぬれば、中宿りもいとよかりぬべけれど、うはの空にて物したらんこそ、なほ便なかるべけれど、（薰は）思ひわづらひて、（京に）帰り給ふに、此のせうとの童を、僧都、目とめてほめ給ふ。（薰）「これに（文を）つけて、まづ（わが訪問を）

ほ

のめかし給へ」と聞え給へば、(僧都は) 文書きて(童に) とらせ給ふ。(僧都)「時々は山におはして、遊びた
まへよ。すゞろなるやうには思すまじき故もありけり」と(童に) うち語らひ給ふ。(夢浮橋、五・四二五。薫
↓僧都、B・①型、僧都↓小君、B・①型)
こうして小君は僧都の手紙を得て下山する。

薫が話し手の最後に按察君に対する一例をみようと思う。

匂宮が夕霧の六の君と結婚し、その第三夜、夕霧は薫を相伴の客として誘う。帰邸後、薫は寝られぬままに按察
君の局に過ぐす。

(139) 例の寢覚がちなつれづれなれば、按察の君とて、人よりは少し思ひまし給へるが局におはして、その夜は
明し給ひつ。明け過ぎたらむを人の咎むべきにもあらぬに、(薫は) 苦しげに急ぎ起き給ふを、(按察は) たゞ
ならず思ふべかめり。

(按察) うち渡し世に許しなき関川をみなれそめけむ名こそ惜しけれ
いとほしければ、

(薫) 深からず上は見ゆれど関川の下のかよひは絶ゆるものかは

(情愛は) ふかしと(薫が) のたまはむにてだに頼もしげなきを、この上の浅さはいとゞ(按察も) 心やましく
思ゆらむかし。(薫は) 妻戸を押しあけて、「まことは、この空見給へ。いかでかこれを知らず顔にては明かさ

第18表 薫が聞き手の場合

話手 (地の敬度)	敬度型				A				B				C				D				N				小計
	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	
八 宮 ㊦								1																	1
匂 宮 ㊦								2																	2
女 三 宮 ㊦								1																	1
夕 霧 ㊦				1				1																	2
大 君 ㊦								3																	3
中 君 ㊦		1						1																	2
玉 鬘 ㊦								2																	2
辨 尼 ㊣				2																					2
従 者 ㊣			1																						1
小 計	0	1	1	2	1	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
	4				12				0				0				0								

『源氏物語』の命令・勧誘表現再論(四)

むとよ。艶なる人真似にはあらで、いと明かしがたくなり
 ゆく、夜な夜なの寢覚には、この世かの世までなむ思ひやら
 れてあはれなる」など、言ひまぎらはしてぞ(薫は)出で給
 ふ。(宿木、五・六七。薫↓按察君、B・①型)

按察君は女三宮に仕える女房の一人とされる。「人よりは少し思
 ひまし給へる」とは、召人として薫の情けを受けていることをさ
 すのであろう。薫の急いで帰るのが按察君には不満である。とこ
 ろで「まことは、この空見給へ」以下は薫が「言ひまぎらはし」、
 ごまかした言葉で、「薫は、自己弁護のあたらぬのを自ら省みて、
 話題を転(『全集』頭注)じたのである。

按察君に対して「この空見給へ」と敬度Bの表現になっている
 のは、この場における薫の心理、即ちごまかそうとしたことに対
 する引け目も反映しているものとみるべきであろう。

一一(二)

第18表は薫が聞き手の場合の一覧表である。用例数は一六、敬
 度指数はプラス一、五〇である。

薫が聞き手の場合の例についてはこれまでに既にその半数を見た。以下、残る例について検討していく。

先ず八宮の一例を見る。次は八宮が薫に姫君達の後見を託す言葉である。

- (140) 宮はまいて例よりもまち喜びきこえ給ひて、此の度は心細げなる物語、いと多く申し給ふ。「(私の) なからむ後、この君たち (姫達) を、さるべき物のたよりもとぶらひ、思ひ捨てぬ物にかずまへ給へ」など、おもむけつ、(薫に) きこえ給へば、(薫) 「一言にてもうけたまはりおきてしかば、(姫達を) さらに思ひたまへおこたるまじくなん。……(この世に) めぐらひ侍らむ限りは、かはらぬ心ざしを御覧じ知らせむとなむ (私は) 思ひ給ふる」などきこえ給へば、(八宮は) うれしと思いたり。(椎本、四・三四六。八宮↓薫、B・①型)
右については特に問題とすべき点はない。

続いて匂宮からの二例をみる。次は、薫が宇治の姫君のことを語り、匂宮がその話に限りなく心を惹かれる場面である。

- (141) (匂宮は) はてはては、まめだちていとねたく、おぼろげの人に心移るまじき人(薫) の、かくふかく思へるを、おろかならじと、ゆかしう思ふこと限りなくなり給ひぬ。(匂宮) 「なほ (今後も) またまたよく (姫君達の) 気色見給へ」と、人(薫) をすゝめ給ひて、かぎりある御身の程のよだけさを、(匂宮は) いとはしきまで心もとなしとおぼしたれば、(橋姫、四・三二七。匂宮↓薫、B・①型)

残る一例も続けて挙げる。次は、右の二年後のことで、薫が中君を匂宮に譲ろうと決心するところである。

- (142) (中君を) ゆづり聞えて、(大君と匂宮の) いづ方の恨みをも負はじなど、(薫が) 下に思ひかまふる心をも

(匂宮は) 知り給はで、心せばくとりなし給ふもをかしけれど、(薫)「例のかららかなる御心ごまに、(中君に) 物思はせんこそ、心苦しかるべけれ」など、親がたになりてきこえ給ふ。(匂宮)「よし、見給へ。かばかりに心にとまることなんまだなかりつる」など、いとまめやかにの給へば、(薫)「かの心どもには、さもやとうち靡きぬべき気色は見えぬなん侍る。仕うまつりにくき宮仕えにこそ侍れや」とて、(宇治に) おはしますべきやうなど、こまかにきこえ知らせ給ふ。(総角、四・四二一。匂宮↓薫、B・①型)

右の匂宮から薫に対する二例はともに「見給へ」であつて「御覧ぜよ」ではない。敬度はBである。前述の薫から匂宮への場合は全二例が敬度Aであつた。殊に(142)の例は

「よし、見給へ。……」など、いとまめやかにの給へば

とあり、薫に対する発話が「の給ふ」と表現されている。対して前述の薫の匂宮に対する発話は二例とも「聞えおきて」である。端的に両者の身分の相違を反映しているものと考えられる。

続いて大君からの残る一例について検討する。大君の臨終直前の言葉である。

(143) (薫)「つひに(私を) うち捨て給ひなば、世にしばしもとまるべきにもあらず。命もし限り有りて、とまるべうとも、(出家して) 深き山にさすらへなんとす。(その折に) たゞいと心苦しうて、(中君の) とまり給はん御ことをなん思ひ聞ゆる」と、いらへさせたてまつらんとて、かの(中君の) 御ことを(口に) かけ給へば、(大君は) 顔は隠したまへる御袖をすこし引きなほして、(大君)「かくはかなかりける物を、思ひぐまなきやうに思されたりつるもかひなければ、このとまり給はん人(中君)をおなじごと思ひ聞え給へ、とほのめかし

聞えしに、たがへ給はざらましかば、後ろやすからましと、これのみなんうらめしき節にて（この世に）とまりぬべう思え侍る」との給へば、（薫）「……」などこしらへて、（大君が）いと苦しげにし給へば、修法の阿闍梨ども召し入れさせ、さまざまに験ある限りして加持まゐらさせ給ふ。（総角、四・四六二。大君↓薫、B・①型）

問題の部分「おなじごと思ひ聞え給へ、とほのめかし聞えし」とあるが、これは先に八宮の一周忌のあと、宇治を訪れた薫の執心に困り果てた大君が、弁尼に改めて自分の意中を語った次の場面を承ける。

(144) 「……げに、かゝるすまひも、たゞ此の（中君）御ゆかりに所せくのみおほゆるを、（薫が）まことに（故父宮の）むかしを思ひ聞え給ふ心ざしならば、（私と）おなじことに（中君を）思ひなし給へかし。身をわけたる心の中は（中君に）みなゆづりて（薫の志を）見たてまつらん心ちなんすべき。猶かうやうに（弁尼より、薫に）よろしげに聞えなされよ」と、はぢらひたる物から、あるべきさまをの給ひ続ければ、いとあはれと（弁尼は）みたてまつる。（総角、四・四〇二）

右の傍点部は薫への希望を弁尼に語っているものと解して用例とはしなかつたものである。右例文(143)の該部分はこの語を承ける。

玉鬢からの二例については特に問題とすべき点はない。用例のみ抄出する。

(145) 「……今宵は、なほうぐひすにも誘はれ給へ」と、の給ひ出だしたれば（竹河、四・二六一。玉鬢↓薫、B・①型）

(146) 「……ついであらば、（我心を、冷泉院に）ほのめかしそうし給へ。……」と、うち嘆い給ふ気色なり。（竹河、

四・二九一。玉鬘↓薫、B・①型

最後に、従者からの一例を検討する。

(47) 十月になりて、五六日のほどに（薫は）宇治へまうでたまふ。（従者）「網代をこそ、このごろは御覽ぜめ」

ときこゆる人々あれど（橋姫、四・三二七。従者↓薫、A・②型）

薫に対する唯一の、係結による②型の例である。従者が網代見物を勧めているのである。当然ながら「御覽ぜめ」と甚だ敬度が高い。なお、「大系」はこの部分を供人二人の発話として

（供人）「網代をこそ」

（供人）「このごろは御覽ぜめ」

のように改行、区別しているが、二分する理由が明らかでない（『……』ときこゆる人々あれど」とはあるが）ので、ここでは一会話として扱った（「大系」のような扱いをしても、この場合は結果的には同じことになるが）。

以上で、薫が聞き手の場合の全一六例の検討を終える。

一三

匂宮の例について検討する。第19表は匂宮が話し手の場合の一覧表である。

用例数は三一、敬度指数はマイナス〇、三五である。この数値は第6表に挙げた主要人物の中、唯一マイナスの例であり、異例に属する。これは匂宮の今上帝の第三皇子という身分の高さと、逆に聞き手の身分の低さとによって、敬

第19表 匂宮が話し手の場合

敬度 型 聞手（地の敬度）	A				B				C				D				小計				
	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①		④	③	②	①
夕霧 ⑥								1													1
薫 ⑥								2													2
中君 ⑥								6													6
宮（姫）君 ⑥					1																1
浮舟 ⑦								3													3
若君（大夫君） ⑦											3										3
家司時方 ⑦											5										5
大内記道定 ⑦									1												1
右近（浮舟乳母子） ⑦											5										5
侍従（浮舟侍女） ⑦											1				2						3
供の男ども ⑦															1						1
小計	0	0	0	0	0	1	0	12	0	1	0	14	0	0	0	3	0	0	0	0	31
	0				13				15				3				0				

度Aの例がなく、約六〇%の例が敬度の低いC・Dの例であることによる。特に敬度Dの例が約一〇%を占めるが、これは（ある程度の用例数をもつものの中では）他に例がない。

表の上部の夕霧、薫に対する例は既に見た。次の中君への例から始める。

次は、早蕨の巻の一節で、中君は匂宮に迎えられて二条院にある。花盛りの頃訪問した薫は、匂宮が参内するというので、西の対の中君の許を訪れる。

(148) (中君は) ひとつづてならず、(薫に) ふとさし出で聞えむ事のなほつ、ましきをやすらひ給ふ程に、みや(匂宮) 出で給はんとて、(中君に参内の) 御まかり申しに渡り給へり。(匂宮は) いと清らにひきつくろひけさうじ給ひて、見るかひある御有様なり。中納言(薫) はこなたになりけりと(匂宮は) 見給ひて、「なか、むげにさし放ちては(簀子に) いだしすゑ給へる。御あたりには、あまり怪しと思ふまで、うしろやすかりし

心寄せを、我がためはをこがましきこともや、とおほゆれど、さすがにむげに隔て多からむは、罪もこそ得れ。(簾中に) ちかやかにて、むかし物語もうち語らひ給へかし」など、(中君に) 聞え給ふものから、(匂宮) 「さはありとも、あまり心ゆるびせんも、又いかにぞや。疑はしき(薫の) 下の心にぞあるや」と、うち返しのたまへば、(早蕨、五・二九。匂宮↓中君、B・①型)

匂宮は、暗に中君と薫の間柄を疑い諷しながらも、

ちかやかにて、むかし物語もうち語らひ給へかし。

と穏やかに優しく中君に勧めている。「かし」によって①型の強さを和らげているのである。

次は、六君との婚儀の翌日帰邸した匂宮が中君をいたわり慰めている場面である。

(149) (匂宮) 「げに、あが君や、幼なの御物言ひやな。されど、(六君に) 誠には心の隅のなければ、いと心安し。いみじうことわりして聞ゆとも、いと著かるべいわざぞ。むげに世のことわりを思し知らぬこそ、らうたき物からわりなけれ。よし、我が身になしても(私の事を) 思ひ廻らし給へ。(私は) 身を心ともせぬ有様なりかし。もし、(私の) 思ふやうなる世もあらば、人に勝りける心ざしの程も(御身に) しらせたてまつるべき一筋なむある。たは易く言出づべき事にもあらねば、命のみこそ」などのたまふほどに、かしこにたてまつり給へる御使、いたく酔ひ過ぎにければ、(中君には) すこし憚るべき事も忘れて、けざやかにこのみなみ面に参れり。

(宿木、五・六一。匂宮↓中君、B・①型)

敬度Bの①型で、ここには特に問題とすべき点はない。

薫から中君に消息があった。紅葉の蔭につけたその消息には宇治の邸の件のみで、懸想じみた言葉はなかった。

(15) 宮(中君に)紅葉たてまつられ給ひければ、(折から)をとこ宮(匂宮)おはします程なりけり。……宮「をかしき蔦かな」と、たゞならずのたまひて、めしよせて見給ふ。御文には「日ごろ何事かおはしますらむ。山里に物し侍りていと、峰の朝霧にまどひ侍りつる。御物語も身づからなむ。かの宮の寝殿、堂になすべき事、阿闍梨に物しつけ侍りにき。御許し侍りてこそは外に移す事も物しはべらめ。辨の尼君にさるべき仰言は遣はせ」などぞある。(匂宮)「よくもつれなく書き給へる文かな。まるありとぞ(薫は)聞きつらん」とのたまふも、少しはげにさやありつらん。女君(中君)はことなきを嬉しと思ひ給ふに、(匂宮が)あながちにかくのたまふを、わりなしと思して、(匂宮を)うち怨じて居給へる御さま、よろづの罪も許しつべくをかし。(匂宮)「返事書き給へ。(私は)見じや」とて(中君)よりほかさまにそむき給へり。(宿木、五・一〇二。匂宮↓中君、B・①型)

匂宮は中君と薫の間柄を疑いながらも、言葉は平静である。なお、中君はここでは女君と表現されている。次は、右に続く場面。

(15) 菊の、まだよくも移ろひはてゞ、わざとつくるひ立てさせ給ひたるは、中々遅きに、いかなる一本にかあらむ、いと見所ありて移ろひたるを、取りわきて折らせ給ひて、(匂宮)「花の中にひとへに」と誦じ給ひて、「なにがしの御子の、この花めでたる夕べぞかし、いにしへ天人の翔りて、琵琶の手教へけるは。何事も浅くなりたる世は物憂しや」とて、御ことさし置き給ふを、(中君は)口惜しと思して、「心こそ浅くもあらめ、昔を伝へたらむ事さへは、などてかさしも」とて、おほつかなき手などを、(中君は)ゆかしげに思いたれば、(匂宮)「さらば、ひとりごとはさうさうしきに、さしいらへし給へかし」とて、人召して、箏の御こと取り寄せさ

せて(中君に)弾かせたてまつり給へど、(宿木、五・一〇四。匂宮↓中君、B・①型)
匂宮と中君は秋の前栽を前に琵琶、箏を合奏し、情愛を深めてゆく。

ひとりごとはさうさうしきに、さしいらへし給へかし、

一人で弾くのは物足りないから、相手をして下さい、と優しく頼む。ここにも「かし」が見られる。

薫によって宇治に囲われている浮舟から中君の許に便りがあり、匂宮は薫からかと疑う。

(152) (浮舟の文は)殊に労々じき節も見えねど、(誰の筆と)思えなきを、(匂宮は)御目立て、この立文を見給へば、げに、女の手にて、(右近の文)「年改まりて何事かさぶらふ。……」となむ、こまごまと、言忌もえしあへず、物嘆かしげなるさまのかたくなしげなるも、(匂宮は)うち返しうち返し、怪しと御覧じて、「今はの給へかし。誰がぞ」との給へば、(中君)「昔、かの山里にありける人のむすめの、さるやうありて、この頃かしこにあるとなん聞き侍りし」と聞え給へば、(匂宮は)おしなべて仕うまつるとは見えぬ文がきと、心得給ふにかの煩はしき事あるに思しあはせつ。卯槌をかしう、つれづれなりける人のしわざと見えたり。またぶりに、山たち花作りて、貫き添へたる枝に、

(浮舟)まだふりぬ物にはあれど君がため深き心にまつと知らなむ

と、(歌は)殊なることなきを、かの思ひ渡る人(浮舟)のにや、と思し寄りぬるに、(これに)御目とまりて、

(匂宮)「返事し給へ。なさけなし。隠い給ふべき(秘密の)文にもあらざめるを。など御気色のあしき。(さ

らば)まかりなんよ」とて、立ち給ひぬ。(浮舟、五・二〇六。匂宮↓中君、B・①型、B・①型)

ここには「今はの給へかし」と「返事し給へ」との二例があるが、うち一例は前例同様「かし」を伴う。中君に

対する以上の六例中三例まで「かし」を使用しており、甚だその使用率が高いが、これについては他の例も含め、後で一括して考察する。

続いて浮舟への例を検討すべき順であるが、物語の展開上、先に浮舟の女房（浮舟の乳母子）右近への例を見ることにする。次は、匂宮が薫を装って浮舟の部屋に入った場面である。

(153) (右近は) ねぶたしと思ひければ、いととう寝入りぬる気色を(匂宮は) 見給ひて、またせんやうもなければ、忍びやかにこの格子をた、き給ふ。右近き、つけて「誰そ」といふ。(匂宮が) 声作り給へば、あてなるしはぶきとき、知りて、との、おはしたるにやと思ひて、起きて出でたり。(匂宮) 「まづこれ(格子を) あげよ」と給へば、(右近) 「怪しう思えなきほどにも侍るかな。夜はいたう更け侍りぬらん物を」と言ふ。(匂宮) 「(浮舟が) 物へわたり給ふべかんなりと、仲信が言ひつれば、驚かれつるま、に出で立ちて、いとこそわりなかりつれ。まづあげよ」との給ふ声、いとよう(薫に) まねび似せ給ひて、忍びたれば、思ひもよらずかい放つ。

(匂宮) 「道にて、いとわりなく恐ろしき事のありつれば、怪しき姿になりてなん(参れり)。火暗うなせ」との給へば、(右近) 「あな、いみじ」とあわて惑ひて、火は取りやりつ。(浮舟、五・二一六。匂宮↓右近、C・①型、C・①型、C・①型、)

ここには匂宮から右近に対する三例が連続する。

①まづこれあげよ

②まづあげよ

③火暗うなせ

緊迫した場面であり、右の如く何れも①型の、簡潔な表現である。①の「まづこれあげよ」から②の「まづあげよ」への順序、変化（「これ」の有無）も自然であり、③の「火暗うなせ」も寸言にこの場における匂宮の心理をも物語る。敬度は当然ながらすべてC。

その翌朝、匂宮は逗留を決意する。匂宮と知った右近が「今日はお帰りになって、お志がございましたら、また」と言うのに対して匂宮は次のように答える。

(154) およずけても言ふかな、とおぼして、(匂宮)「われは(浮舟を)月頃思ひつるに、惚れ果て、ければ、人のもどかんも知られず、ひたぶるに思ひなりにたり。少しも身の事を思はゞ、かゝらむ人のかゝる歩きは思ひたちなんや。(母北方への)御返りには、(浮舟は)今日は物忌など言へかし。人に知らるまじき事を、たがためにも思へかし。他事はかひなし」との給ひて、この人(浮舟)の世に知らずあはれに思さるゝまゝに、よろづの誹りも忘れ給ひぬべし。(浮舟、五・二二九。匂宮↓右近、C・①型、C・①型)

ここでの右近に対する匂宮の言葉は昨夜の緊迫した状況の時と違って優しい。これはいわば浮舟への「飽かずあはれなる」愛情に随伴するものでもあろうが、二例は

今日は物忌など言へかし、

たがためにも思へかし、

とあって、ともに「かし」を伴う。従って現代語訳も一部の注釈書に見られる今日は物忌だとも言うのだ。

誰のためにも思うのだ。

といった強い調子でなく、

今日は物忌だと言っておくれ。 / 今日は物忌だと言いなさい。

誰のためにも考えておくれ。 / 誰のためにもお思いなさい。

といったところであろう。敬度はCであるが、「かし」の、命令形の強さを和らげ、優しく相手に働き掛ける調子を重んじて、後者のように訳したいと思う。

浮舟への例をみる。次は、右の右近に対する例の少し後の場面である。匂宮は浮舟の許に逗留している。

- (155) 日高くなれば、格子などあげて、右近ぞちかく仕うまつりける。母屋の簾垂はみなおろし渡して、「物忌」など書かせてつけたり。母君もや身づからおはするとて、夢見さわがしかりつ、と言ひなすなりけり。御手水など(右近が)参りたる様は、例のやうなれど、(浮舟の)まかなひ目ざましう思されて、(匂宮)「そこに洗はせ給はゞ」との給ふ。女(浮舟)いと様よう心憎き人(薫)を見習ひたるに、時の間も(浮舟を)見ざらんに死ぬべし、と思し焦るゝ人(匂宮)を、心ざし深しとは、かゝるを言ふにやあらん、と思ひ知らるゝにも、怪しかりける身かな、誰も、物の聞えあらば、いかに思さんと、(浮舟は)まづ、かの上(中君)の御心を思ひ出で聞ゆれど、しらぬを、(匂宮)「返す返すいと心憂し。なほあらむまゝにの給へ。いみじき下衆と言ふとも、いよいよなんあはれなるべき」と、わりなう問ひ給へど、(浮舟は)その御答へは絶えてせず。(浮舟、五・二二二。匂宮↓浮舟、B①型)

浮舟は以下「女」と表現されている。匂宮は「女」が素性を明かそうとしないので、「なほ、あらむまゝ、にの給へ」と不満を述べているところである。

次は、右に続く場面である。いつの間にか日暮れになった。匂宮は手習に絵を描く。

(150) 硯ひき寄せて、手習などし給ふ。いとをかしげに書きすさび、絵などを見所多く書き給へれば、(浮舟の)若き心地には(匂宮に)思ひも移りぬべし。(匂宮)「心よりほかに、見ざらん程は、これを見給へよ」とて、いとをかしげなる男女、もろ共に添ひ臥したるかた(絵)を書き給ひて、(匂宮)「常にかくてあらばや」などの給ふも、(匂宮は)涙おちぬ。(浮舟、五・二二三)。匂宮↓浮舟、B・①型)

浮舟はここでも「女」と表現されている(右の引用外に)。匂宮は、美貌の男女と一緒に添寝をしている絵を描いて「これを見給へよ」と言う。文末に「よ」を伴う命令・勧誘表現の数は物語中一五例で、男から女に対しての例が多いが、匂宮にはこの一例だけ見られる。優しく、親しみを込めながら説き聞かせているのである。「涙落ちぬ」とあり、浮舟への塞きあえぬ感情からの言葉であることが知られよう。

月が改まって二月、匂宮は再び宇治に赴き、またも薫を装って浮舟に接近し、翌朝、小舟で対岸に渡る。次は橘の小島のほたりを行きながら、歌を贈答する二人の様である。

(157) いとほかなげなる物と、あけくれ見出だす小さき舟に乗り給ひて(川を)さし渡り給ふ程、はるかならん岸にしも漕ぎ離れたらんやうに、心細く思えて、つとつきて抱かれたるもいとらうたしと(匂宮は)おぼす。有明の月澄みのぼりて、水の面も曇りなきに、(舟人)「これなん橘の小島」と申して、御舟しばしさしとゞめたるを、(匂宮が)見給へば、大きやかなる岩のさまして、ざれたる常盤木の影しげれり。(匂宮)「かれ見給へ」。

いとかなけれど、千年も経べき緑の深さを」との給ひて、

年経とも変らん物かたち花の小島がさきに契る心は

女(浮舟)も珍しからむ道のやうに思えて、

たち花の小島は色も変らじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

折から、人の様に、(匂宮は)をかしくのみ何事も思しなす。(浮舟、五・二三七。匂宮↓浮舟、B・①型)
右の「かれ見給へ」については特に言うことはない。

以上、浮舟に対する三例を見た。いずれも①型、敬度はBである。注意すべきは第二例の「よ」の例であった。

次は、右近とともに浮舟に近侍する侍従への例を見る。

浮舟の失踪後、匂宮は右近を二条院に呼んだが、代わりに侍従が参上した。次は、侍従から浮舟の死の前後の様子を聞く場面である。

(158) 匂宮は、この人(侍従)参れりと聞し召すもあはれなり。……(侍従)「御文を焼き失ひ給ひしなどに、(私どもは)などで目を立て侍らざりけむ」など、夜一夜語らひ給ふに、聞えあかす。かの巻数に書きつけ給へりし母君の返事などを聞ゆ。なにばかりの者とも御覽ぜざりし人(侍従)も、睦しくあはれに(匂宮は)思さるれば、「我がもとに(仕へて)あれかし。あなた(中君)も、もて離るべくやは」との給へば、(侍従)「さぶらはんにつけても、(私は)物のみ悲しからむを思ひ給ふれば、(宇治にて)今この御果てなど過ぐして」と聞ゆ。
(匂宮)「又も参れ」など、この人をさへ(別れを)飽かずおぼす。(蜻蛉、五・二九九。匂宮↓侍従、C・①)

型、D・①型)

以前はなにばかりの者でもなかった侍従であるが、なき浮舟のゆかりのゆえに「睦しくあはれに思さ」れて、侍女として傍に置こうとする。ただし、次例(159)の如く「さぶらへ」と命ずるのではない。「我がもとにあれかし」とあり、「私の傍で暮すがよい」と優しく求めているのである。「かし」の表現効果を思う。いま一例は「又も参れ」である。浮舟への執着からの言葉であるが、これについては特に問題とすべき点はない。

浮舟の四十九日の後、匂宮はまた侍従を迎える。

(159) 侍従は(浮舟と)よそ人なれど、なほ(乳母、右近と)かたらひてあり経るに、世づかぬ川の音も、嬉しき瀬もやあると頼みし程こそなぐさめけれ、(浮舟亡き今は)心憂くいみじく物恐ろしくのみ思えて、京になん怪しき所に、この頃来て居たりける。(それを)尋ね出で給ひて、(匂宮)「かくて(わが二条院に)さぶらへ」との給へど、御心はさるものにて、人々の言はむ事も、さる筋の事まじりぬるあたりは、聞き憎き事もあらん、とおもへば、(侍従は)うけひき聞えず、(蜻蛉、五・三三五。匂宮↓侍従、D・①型)

ここは前例と違って「かくてさぶらへ」とあるが、両者の身分関係からみて、むしろこの表現の方が普通であろう。

以上、中君、右近、浮舟、侍従等用例の多い女性に対する例について検討してきた(女性への例としては、この他宮(姫)に対する一例―省略―があり、全部で一八例となる)。これ以外に若君、家司時方等数名への例があるが、これらの検討は省略する。

第20表 「かし」の性別使用数

話手→聞手	総数	「かし」	%	
男→男	162	2	1.2	7.3
男→女	292	31	10.6	
女→男	53	7	13.2	9.4
女→女	107	8	7.5	
計	614	48	7.8	

物怪・神仏等への27例を除く。

一四

さて、先に指摘したように、匂宮には「かし」の用例が多い。ここでその問題を考察するが、それに先立って、物語全体の「かし」について見ておきたい。

物語中、命令・勧誘表現に用いられた「かし」の例を、話し手、聞き手の性別に整理したのが第20表である。計四八例である。表の「総数」とは、命令・勧誘表現の数をいう。性別の整理であるから物怪・神仏に対する命令・勧誘表現二七例は除外してある。なおこの二七例中には「かし」の例はない。

この表で話し手の男女別による使用率は七、三%と九、四%とであるから、それほど大きい違いはない。しかし、これが男から男へという場合の使用例は僅かに次の二例、一、二%にしか過ぎない。

- (160) (源氏が) 内裏におはする程にて、(右大臣からの歌を) うへに奏し給ふ。(帝)
 「したり顔なりや」と笑はせ給ひて、わざと(右大臣の迎えが) あめるを、早うものせよかし。(弘徽殿腹の) 女御子達なども生ひ出づる所なれば、(源氏を) なべてのさまには思ふまじきを」など、の給はず。(花宴、一・三一一。桐壺帝↓源氏、C・①型)

ここは右大臣邸の藤の宴に招かれた源氏に、父帝が「わざわざ迎えが来たようだから

ら、早く行くがよい」と優しく出向を促している場面である。

(66) (匂宮)「内裏ならで、(私の二条院の)心やすき所にも、時々は遊べかし。(二条院は)わかき人々のそこは

かとなく集まる所ぞ」との給ふ。(紅梅、四・二四三。匂宮↓若君、C・①型)

これは匂宮から幼い若君(殿上童)に対するものである。

「かし」は強く念を押す意味を表わすとされるが、命令・勧誘表現における「かし」は、普通にいわれるよりはもっと優しい、相手に説き聞かすような調子の語であろう。命令形で言い放つては強すぎる場合、むしろそれを和らげる効果を持つものと解される。次の各組を比較すればその「かし」の表現価値がよく知られようと思う。

① 「よべより、六条の院に侍ひて、たゞ今なむまかでつる、といへ」とて、いふべきやう、さゝめきをしへ給ふ。(夕霧、四・一二五。夕霧↓右近将監(家人)、C・①型)

2 「しばし見ぬだに恋しきものを、遠くはまして、いかに、といへかし」との給はず。(須磨、二・二七。春宮↓王命婦、C・①型)

① 「まづ時方、いりて侍従に逢ひて、さるべき様にたばかれ」とて、つかはず。(浮舟、五・二六八。匂宮↓家司時方、C・①型)

2 「いとおほつかなく、心えぬ心地するを、かの(末摘花の)御ゆるしならずとも、たばかれかし。心いられし、うたてあるもてなしには、よもあらじ」など、かたらひ給ふ。(末摘花、一・二四五。源氏↓大輔命婦、C・①型)

右①②の「1」はいずれも男から男へ、「2」の「かし」を有する例はともに男から女への例である。

◎1 「いとかく慰めむかたなきよりはと、思ひより侍る人形の願ひばかりには、などかは山里の本尊にも思ひ侍らざらむ。猶、たしかにのたまはせよ」とうちつけに責め聞え給ふ。(宿木、五・九二。薰↓中君、A・①型)

2 「ともかくも定めさせ給はむに従ひてこそはとてなん。あるべからむやうに、のたまはせよかし。……」など、まめだちたる事どもを聞え給ふ。(宿木、五・五二。薰↓中君、A・①型)

右は例文(120・117)の抄であり、ともに薰から中君への例である。「1」は「うちつけに責め聞え給ふ」とあり、「2」との話しぶりの相違は明らかであろう。詳細は既述に譲る。

④1 「わざとはなくとも、このわたりにも、音なふ折あらむついでに、かくなむ言ひしとつたへ給へ」などばかりのたまひ置く。(宿木、五・一〇〇。薰↓弁尼、B・①型)

2 「かくちぎり深くてなむ参り来あひたると、つたへ給へかし」とのたまへば、……「さらば、しか伝え侍らむ」とて入るに、(宿木、五・一二七。薰↓弁尼、B・①型)

これはともに、薰が浮舟への仲介、伝言を弁尼に依頼したもので、既に例文(126・127)で検討した例である。第20表によれば、「かし」は

(1)女の利用率が高い。

更に聞き手との関係からみれば、

(2)女から男への利用率が最も高く、男から女への場合がそれに次ぐ。つまり異性間での利用率が甚だ高い。

(3)さらに同性間についてみれば、女から女への例は全平均値にほぼ近いが、男から男への例は極めて限られてい

る。

こうした事実によっても、

力を添ふることは「な」（間投助詞―筆者注）よりも強く、確乎として動かすべからざる勢をあらはすなり。^{*38}

とまでは、この（命令・勧誘表現の）場合は当たらずであらう。更に、既に例文(37)として検討した例であるが、

(162) (若紫は) やがて (源氏の) 御膝によりかゝりて、寝入り給ひぬれば、(源氏は) 心苦しうて、「今宵は出でずなりぬ」との給へば、(女房達は) みな立ちて御膳などこなたに参らせたり。ひめ君起したてまつり給ひて「出でずなりぬ」と聞え給へば、なぐさみて起き給へり。もろともに物などまるる。いとかなげにすさびて、(若

紫) 「さらば (源氏も) 寝給ひねかし」と、(源氏の外出を) あやふげに思う給へば、かゝるを見捨てては、いみじき道なりとも、おもむきがたく思え給ふ。(紅葉賀、一・二八八。若紫↓源氏、B・①型)

若紫はこの時十一歳、年齢に比してまだ言動は子供らし過ぎ、乳母に注意されている。この「寝給ひねかし」という表現も幼い言葉つきであろう(詳細既述)。こうした親昵ないし押昵の調子の語は、大の男同士では使いにくかったのではなからうか。

松下大三郎著『改撰標準日本文法』では「かし」を

「よ」の意に近い。親切に告げる意が有る。

と説いている。^{*39} 簡潔な説明ではあるが、よく肯綮にあたっているように思われる。男から男への、前掲二例の、話し手、聞き手の関係(匂宮↓若君(殿上童)、桐壺帝↓源氏)、及びその表現形式(二例とも常体表現。もつとも桐壺帝から源氏に対しては常に常体表現である)も、この語の親愛の響きを感じさせる。男から男への使用例の少な

第21表 主要人物の「かし」の使用数

話手	聞手	総数	「かし」	%
源氏	男	55	0	0
	女	126	16	12.7
薫	男	17	0	0
	女	41	5	12.2
匂宮	男	13	1	7.7
	女	18	6	33.3
夕霧	男	9	0	0
	女	17	1	6.0
柏木	男	6	0	0
	女	12	0	0

いことは、以上のような「かし」の調子によるものと思われるのである。次の第21表は、これまでに検討して来た主要人物（男性）の「かし」の使用状況を整理したものである。先の第20表で、男から女へは三一例であったが、その大部分の二七例を源氏、薫、匂宮の三者で占めていることを見る。女から男への場合は七例が七人の話し手によるものであるのとは極めて対蹠的である。従って、男の平均の数値（%）はこの三者によって形成されていることになる。しかも源氏が一二、七%、薫が一、二%であるのに対して、匂宮は一八例中六例、実に三例に一例の割合で、三三、三%に及ぶ。匂宮の使用率は真に突出しているというべきである。この数値は何を物語るであろうか。

源氏は別として、薫と匂宮の「かし」の例はこれまでにすべて検討したが、ここで三者の全用例を適記する。なお、すべて①型であるから、その表示は省略する。

源氏の例

①（源氏）「いざ、いと心安きところにて、のどかに聞えむ」など、語らひ給へば、（女）「……」といと若びていへば、「げに」とほほゑまれ給うて、「いづれか狐ならんな。たゞはかられ給へかし」と、な

つかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。(夕顔、一・一三八。源氏↓女(夕顔)、B)

ここは「なつかしげにのたまへば」とあるのに注意すべきであろう。その内容も「一層のこと、私にだまされなさいよ(私のする通りに、任せなさいよ)」(「大系」というものである。勸奨ということになる)。

② (源氏)「かの中將にも伝ふべけれど、いふかひなきかごと負ひなん。とさまかうさまにつけて、(女兒を)はぐくまむに、咎あるまじきを。そのあらむ乳母などにもことさまにいひなして、(ここに女兒を)ものせよかし」など語らひ給ふ。(夕顔、一・一六七。源氏↓右近(夕顔侍女)、C)

ここは夕顔の遺児を自ら育てたいからと右近に依頼する場面である。

③ (源氏)「おのづから、さるやうありてきこゆるならむ、と思ひなし給へかし」との給へば、(女房は)入りて(尼に)きこゆ。(若紫、一・一九三。源氏↓女房(若紫の)、B)

これは既に例文②として検討した文中の例である。場面の詳細はそれに譲るが、女房に対しても「給ふ」を繰り返しながらの言であり、依頼者の立場の言葉遣として解すべき例である。以下、場面の説明等は、一、二を除き省略する。

④ うち泣い給ひて、いと(そのまま)見捨てがたき(若紫の)程なれば、(源氏)「御格子まゐりね。物恐ろしき夜のさまなめるを。とのゐ人にて侍らん。人々(ここに)近う侍はれよかし」とて、いと馴れ顔に御帳の内に入り給へば、(女房達は)「あやしう思ひの外にも」と、あきれて誰も誰もゐたり。(若紫、一・二一七。源氏↓女房達(若紫の)、B)

- ⑤ (源氏)「(若紫とともに)人ひとり参られよかし」と、の給へば、(若紫、一・二二六。源氏↓少納言(若紫の乳母、B))
- ⑥ (源氏)「いとおほつかなう、心えぬ心地するを、かの(末摘花の)御ゆるしならずとも、たばかれかし。心いられし、うたてあるもてなしには、よもあらじ」など、かたらひ給ふ。(末摘花、一・二四五。源氏↓大輔命婦、C)
- ⑦ (源氏)「いくそたび君がしゝまに負けぬらむものな言ひそといはぬたのみに(私を)の給ひも捨て、よかし。玉だすきくるし」との給ふ。(末摘花、一・二四九。源氏↓末摘花、B)
- ⑧ (源氏)「今年だに声すこし聞かせ給へかし。侍たる、もの(鶯)はさしおかれて、(末摘花の)御気色の改まらんなんゆかしき」との給へば、(末摘花)「さへづる春は」と、辛うじて(声を)わな、かし出でたり。(末摘花、一・二六六。源氏↓末摘花、B)
- ⑨ (源氏)「……さるべきをりをりは、(私の)うち忘れたらむ事も、(私を)おどろかし給へかし。……」とのたまひて、向ひの院の御倉あけさせて、絹、綾などたてまつらせ給ふ。(初音、二・三八六。源氏↓末摘花、B)
- ⑩ (源氏)「月出でにけりな。(こなたに)猶少し出で、(私を)みだに送り給へかし。……」とて、御簾まき上げて、端の方に(紫上を)いざなひ聞え給へば、女君なき沈み給へる、(須磨、二・二二九。源氏↓紫上、B)
- ⑪ (源氏)「……。いわけなげなる下つかたも、(袴着せてしどけなさを)まぎらはさむなど思ふを、めざましとおぼさずば、(袴の腰を)ひき結び給へかし」と、(紫上に)きこえ給ふ。(松風、二・二二〇。源氏↓紫上、

B)

これは既に例文(4)として検討した文中の例である。場面の詳細はそれに譲るが、源氏は紫上の気持ちを忖度し、慎重に相手の意向を尋ね、相手を立てながら、優しく働き掛けていいる言葉である。^{*40}

- ⑫ (源氏)「……(四十の賀を催して)かう(年を)かぞへ知らせ給へるにつけては、(古いも知られて)心細くなん。時々は、老いやまさると、見給ひくらべよかし。かくふるめかき身の所せさに、思ふにしたがひて(君と)対面なきもいとくちをしくなむ」など、(玉鬘に)きこえ給ひて、(若菜上、二・二四五。源氏↓玉鬘、B)

- ⑬ (源氏)「その世(桐壺院)の事は、みな昔語りになりゆくを。(それを)はるかに思ひ出づるも心細きに、うれしき昔の御声かな。親なしに臥せる旅人と、(私を)はぐくみ給へかし」とて、(物に)寄り居給へる(源氏の)御けはひに、(源内侍は)いとむかし思ひ出でつ、(今も猶)ふりがたくなまめかき様に(身を)もてなして、(朝顔、二・二六〇。源氏↓源内侍、B)

源氏は突然昔の源内侍に会って驚く。源内侍はこの時、七十歳か七十一歳である。「全集」は「心細きに」以下に注して「源氏の言葉は、源内侍に対するからかい半分のうちれしがらせ、社交辞令である。」とし、「かわいがつてくだされ」と口語訳する。また、「集成」は「親なしに」以下について「親子ほどの年齢の差を皮肉る気持ちがある。」と注する。これによれば、右は命令・勧誘表現、換言すれば命令形に下接する「かし」が「からかい」や「皮肉」の気持の文脈で使われている珍しい例となる。

- ⑭ (源氏)「年ごろになりぬる心ちして、(君を)見たてまつるも、心やすく本意かなひぬるを。つ、みなくもて

なし給ひて、あなた（紫上方）などにも渡り給へかし。いわけなき初琴ならふ人もあめるを、もろともに聞きならし給へ。……」と（玉鬘に）聞え給へば、（玉鬘）「のたまはむまゝにこそは」と、きこえ給ふ。（初音、二・三八一。源氏↓玉鬘、B）

⑮（源氏）「思ふやうなるべき（御身と女三宮との）御なからひにこそはあなれ。（女三宮は）いと幼げにもものし給ふめるを。うしろやすく教へなし給へかし」と、（対面を）ゆるし聞え給ふ。（若菜上、三・二六六。源氏↓紫上、B）

⑯（源氏）「今は、いとま許して打ち休ませ給へかし。物の師は、心ゆかせてこそ。……」とて、御琴どもおしやりて御殿籠りぬ。（若菜下、三・三六二。源氏↓女三宮、A）

これは既述例文⁽¹⁰⁸⁾の抄出である。

源氏の「かし」の例は以上の一六例である。いずれも「命令形ーかし」の形であるが、その意味、話し手の意図は数例を除き、他はほとんどが依頼とみるべきものであろう。敬度も②（↓右近）、⑥（↓大輔命婦）の二例を除いてはBまたはAである。結局、これらの「かし」は、命令形の強さを柔らげ、優しく相手に働き掛け、時に説き聞かすような調子の語と解し得ると考える。

続いて、薫と匂宮の例を再掲する。ただ、この両者の例はすべて検討済みであるから、述語の中心的な部分のみを記す。

薫の例

① 「過ぎさせ給ひてよかし」（薫↓大君、A。例文⁽¹¹⁰⁾）

- ② 「のたまはせよかし」(薰↓中君、A。例文(117))
- ③ 「思し出でよかし」(薰↓中君、B。例文(118))
- ④ 「つたへ果てさせ給へかし」(薰↓中君、A。例文(121))
- ⑤ 「つたへ給へかし」(薰↓弁尼、B。例文(127))

右の五例の聞き手は大君、中君及びその後見の弁尼である。五例中三例が中君に対するものであるが、薰は中君に對して柔らかに依頼している場合が比較的多いことについて、既に例文(121)のところでも触れた。敬度Aが三例、敬度Bが二例であり、敬度指数も高い。

匂宮の例

- ① 「うち語らひ給へかし」(匂宮↓中君、B。例文(148))
- ② 「さしいらへし給へかし」(匂宮↓中君、B。例文(151))
- ③ 「の給へかし」(匂宮↓中君、B。例文(152))
- ④ 「言へかし」(匂宮↓右近、C。例文(154))
- ⑤ 「思へかし」(匂宮↓右近、C。例文(154))
- ⑥ 「あれかし」(匂宮↓侍従、C。例文(158))

右の六例の聞き手は中君と浮舟の侍女の右近、侍従の三者である。半数の三例が敬度Cの相手に対するものである。浮舟への思いの故に右近、侍従に對しても表現は優しい。

第21表に掲げた五名を「かし」の%の高低順に並べると次のようになる。

匂宮……………三三、三%
 源氏……………一二、七%
 薫……………一二、二%
 夕霧……………六、〇%
 柏木……………〇、〇%

物語の男から女に対する「かし」の%は一〇、六であるから、それをやや上回る源氏と薫を中に挟んで、両端に匂宮と柏木とが対立する。

匂宮は

光源氏の色好みとしての側面を強調されて受け継いでいると言えよう。多感で行動力ある「あだ人」ぶりは薫と対照的で、不遇な境遇の女性との容易に許されない恋に夢中になる傾向がある。^{*41}

といわれるが、三三、三%という「かし」の使用率の異常な高さは、匂宮の人となり、その浮薄さによるものである。具体的には女性への接し方が、よく言えば上手だということである。女性に優しい言葉を掛けるのである。この点は逆に堅物といわれる夕霧と対比することによって、より明らかになると思う。夕霧には「かし」の例が一例しかない。例文④の「ひたぶるに思しなりねかし」である。詳しくは既述の説明に譲るが、夕霧が落葉宮に強く迫った場面での例である。夕霧は「この世に目馴れぬまめ人」(三・一五六)であり、その故に「世の中のしがましき名を取り」その馬鹿正直さを「人も、もどきし」(四・一五七)と自ら認める人物である。女性に対する一七例中「かし」が一例しか用いられていないところに、匂宮とは反対の、「まめ人」夕霧の人となり、女性への接し

方を認めてはうがち過ぎであろうか。

次は柏木の場合についてみる。柏木の女性に対する一二例中に「かし」の例はない。これをどう解するか。夕霧の場合と同じく考えられるであろうか。

これまで繰り返してきたように、「かし」は命令形の強さを和らげ、優しく相手に働き掛けるものであった。これは話し手の場面への配慮、相手への顧慮なくしてはあり得ぬものである。しかし、柏木にはそれが全然見られない。小侍従に女三宮への手引きを依頼するとき、柏木は必死なのである。冷静さを欠き、ひたすら懇願し嘆願する柏木には、相手の立場や心情を顧みる余裕などない。甚だしい心理的劣位にあつては、優しく相手を説き聞かすような言葉は出ぬ道理である。また、女三宮に対しても例えば「うつし心も失せ」て、必死に「あはれとだにのたまはせよと、おどし聞ゆる」時、柏木には何も見えていない。ただ自らの激情を直接的、直線的にぶつけるのみである。ここには表現を柔らげる「かし」の入り込む余地はない。柏木に「かし」の例が見られぬことは右のように解すべきものと考ええる。(小侍従と女三宮とに対する例については例文㉔から㉘において詳細に検討した。)

もし、命令・勧誘表現における「かし」が、通説—古語辞典類の多くに説く如く、強く念を押す意味であるとするならば、逆に柏木にこそ多くの例を見るはずであろうと考える。

以上、「かし」の使用の多寡の問題を、「かし」の表現価値と話し手、場面等の関係から考察した。

一五

再び匂宮に戻って、その聞き手の場合を考察する。第22表は匂宮の聞き手の場合の一覧表である。

第22表 匂宮が聞き手の場合

敬度 型 話手(地の敬度)	A				B				C				D				N				小計
	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	
大宮(匂宮の母) ⑥								2													2
紫 上 ⑥								2													2
薫 ⑥				2																	2
大内記道定 ⑦			2																		2
侍従(浮舟侍女) ⑦				1																	1
小 計	0	0	2	3	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	5				4				0				0								

用例数は九、敬度指数はプラス二、一一である。この数値は第6表に挙げた主要人物(用例が多い人物)中最も高い。これは今上帝の第三皇子という身分の高さにより、敬度A、Bだけの用例であることによる。

先ず、母の明石中宮の二例を見る。

(163) 宮(匂宮)は(薫に)まして御心にかゝらぬ折なく(中君を)恋しくうしろめたしとおぼす。(明石中宮)「御心につきておぼす人あらば、こゝに参らせて、例ざまにのどやかにもてなし給へ。(今上が)筋殊に(御身を)思ひ聞え給へるに、(忍び歩きは)かるびたるやうに人の聞ゆべかめるも、(私は)いとなん口惜しき」と、大宮はあけくれ聞え給ふ。(総角、四・四四三。明石中宮(大宮)↓匂宮、B・①型)

ここには母の明石中宮が、「かるびたるやうに人の聞ゆべかめる」匂宮の微行を諫めている場面のもの。

第二例を見る。匂宮は何かと差し支えが多く、心ならずも中君を訪れることが出来ない。その匂宮を母の大宮が諫めているところである。

(164) はかなく人(女)を見給ふにつけても、さるは(中君が)御心に離る、折なし。左の大殿のわたり(六君)のこと、大宮も「猶さるのどやかなる御後見をまうけ給ひて、そのほかに尋ねまほしく思さる、人あらば、

(お側に) 参らせて、(御身は) 重々しくもてなし給へ」と、きこえ給へど、(匂宮)「しばし。さ思う給ふるやう(侍り)」など、きこえいなび給ひて、まことにつらき目はいかで見せむなど思す御心を(中君は) 知り給はねば、月日に添へて物をのみ思す。(総角、四・四五二。明石中宮(大宮) ↓ 匂宮、B・①型)

右の二例はともに敬度Bの①型である。特に問題とすべき点はない。

表の第二欄・第三欄の紫上、薫の例は既に触れた。即ち御法の巻で、紫上が幼い匂宮(五歳)に遺言する場面に、敬度Bの①型の例が二例あるが、これは既に紫上の項でみたものである。また、薫の例は例文(133)・(134)で検討した、ともに敬度Aの①型の二例である。

次は、大内記道定の二例を見ることとするが、その前に関連する匂宮から道定への例を併せてみることにする。匂宮は道定に宇治行きの計画を相談する。道定は文中に言うように、匂宮に取り入って昇進したいと願っている男である。

(165) (匂宮は) たゞその(浮舟の) ことを、この頃は思し染みたり。……宇治へ忍びておはしまさん事をのみ思しめぐらす。この内記は望むことありて、夜昼、いかで御心に入らんと思ふ頃、例よりはなつかしう召し使ひて、(匂宮)「いと難きことなりとも、わが言はむことは、たばかりてむや」などの給ふ。(道定は) かしこまりてさぶらふ。(浮舟、五・二一〇。匂宮 ↓ 道定、C・③型)

ここは既に例文(85)に関し、略説した例である。身分の差から言つて当然敬度はCであるが、匂宮の数少ない③型の例で、下手に出た言い方である。その依頼者としての心理は、「いと難きことなりとも」という表現にも窺われよ

う。
右に続いて匂宮は、人に知られないようにするにはどうしたらいいか、と尋ねる。次はそれに対する道定の言葉である。

(166) (道定) あなわづらはしと思へど、「(宇治に) おはしまさん事は、いと荒き山道になん侍れど、殊に程遠くはさぶらはずなん。夕つ方いでさせおはしまして、亥、子の時にはおはしまし着きなん。さて暁にこそは帰らせ給はめ。人の知り侍らんことは、たゞ御供にさぶらひ侍らんこそは。それも深き心はいかでか知り侍らん」と申す。(浮舟、五・二二一。道定↓匂宮、A・②型)

ここは敬度Aの②型。「暁にこそは帰らせ給はめ」とあって、係結による勸奨の例である。次の「全集」の忠実な口語訳がよくその内容、調子を伝えていよう。

夜明ごろお帰りになられますのがよろしゅうございましょう。

道定の残る一例は、右の後匂宮が道定の案内で宇治に赴いた場面での例である。

(167) 急ぎて(匂宮は)宵過ぐる程に(宇治に)おはしましぬ。内記、案内よく知れるかの(薫)殿の人に(様子)を(問ひ聞きたりければ、宿直人ある方には寄らで、葦垣しこめたる西おもてを、やをら少しこぼちて(道定は)入りぬ。我もさすがにまだ見ぬ御すまひなれば、たどたどしけれど(邸内に)人繁うなどしあらねば、寢殿の南おもてにぞ、火ほのかに暗う見えて、そよそよと(衣ずれの)音する、(匂宮の許に)まゐりて(道定)「まだ人は起きて侍るべし。たゞこれよりおはしまさむ」と、しるべして入れたてまつる。(浮舟、五・二二二。道定↓匂宮、A・②型)

ここも敬度Aの②型。「おはしませ」と言わず、「おはしまさむ」とあり、前例と同様に相手の行為の実現を推量することによって、結果として勸奨の意を表わしている。

最後に、侍従の一例を検討する。

(68) (匂宮)ためらひ給ひて、「たゞ一言も(浮舟に)え聞えさすまじきか。いかなれば今更にかゝるぞ。なほ人々の、(薫に)いひなしたるやうあるべし」との給ふ。(侍従は)有様くはしく聞えて、(侍従)「やがて、さ思し召さむ日を、かねては散るまじき様に、たばからせ給へ。かくかたじけなき事どもを見たてまつり侍れば、身を捨て、も思う給へたばかり侍らむ」と聞ゆ。(浮舟、五・二七〇。侍従↓匂宮、A・①型)
匂宮は浮舟を迎える旨の消息をするが、浮舟からの返事がないので、自ら宇治へ赴く。けれども嚴重な警固のため浮舟に会うことは出来ず、侍従の話の聞くだけである。

侍従は、「かねては散るまじき様に、たばからせ給へ」(計画が事前に人に漏れぬように御計画なさいませ)と言う。そして「身を捨て、も思う給へたばかり侍らむ」と宮のために尽そうと決心した。匂宮に対するものであるから敬度は当然A。①型であるのは侍従の意気込みの反照と解されようか。

以上で、匂宮が聞き手の場合の検討を終える。

注

- * 33 拙稿「重層会話文―入子型の構造をもつ会話文の呼称―」（解釈学会「解釈」第三九卷第七号、平成五年七月）
 「全集」(5) 四三五、頭注
- * 34 ④型「やは……(せ) 給はぬ」の表現価値については、拙稿「中古仮名文における命令・勧誘表現体系」（『国語国文』第四四卷第三号、一九七五年）で詳説した。
- * 35 今泉忠義『源氏物語 現代語訳』（九・一八三頁。桜楓社）
- * 36 『敬度』『敬度値』『敬度指数』―敬意の度合の客観的な把握のために」（『比較文化論叢』1。一九九八年三月）
- * 37 山田孝雄『日本文法論』六八三頁。
- * 38 『改撰標準日本文法』では「文語の感動態」という項で「文語の諸品詞のそれぞれの格は次の様な助辞を付けて感動態を表示する。」として「よ」について「自己の了解を指示するものである。この助辞が附いた詞は感動態となる。」と説明し、いわゆる「呼び掛け」「命令形ーよ」「禁止ーよ」等の例を挙げている。次に「かし」について、本文に引用した説明の後、「命令形ーかし」他の例を挙げている。
- * 40 例文4の説明の所で、現代語訳の二行目と三行目との間に入るべき文が脱落していた。次をそこに補う。
 ここで育ててくださいませでしょうか（くださいませんか）。
- * 41 秋山虔・室伏信助編『源氏物語必携事典』所収「源氏物語作中人物事典」、角川書店。

本稿は、平成十二年度札幌大学研究助成金による研究である。